

	S	S	S	S	S		
	S	S	S	S	S		
w	%	%	S	S	&		
	%	%	S	S	&		
	,	,	S	S	%%		
	,)	S	S	,	S) S
	,)	S	S	,	S	&
	&)	S	S	+		
	&)	S	S	+		
	S	S	S	S	S		
	S	S	S	S	S		
	&)	S	S	+		
	&)	S	S	+		
	S	S	S	S	S		
	S	S	S	S	S		
w	%	S	S	S	%		
	%	S	S	S	%		
	,)	S	S	,		
	,)	S	S	,		
)	&	&	%	%%	S	&*
)	&	&	%	%%	S	&*
	(&	&	%	-		
	(&	&	%	-		
	S	S	S	S	S		
	S	S	S	S	S		
	(&	&	%	-		
	(&	&	%	-		
	S	S	S	S	S		
	S	S	S	S	S		
w	%	S	S	S	%		
	%	S	S	S	%		
)	&	&	%	%%		
)	&	&	%	%%		
	%	%	&	%	&	S	
	%	%	&	%	&	S	
	%	%	(%	' +	S	
	%	%	(%	' *	S	
		&&		S		&&	
		&&		S		&&	
		S		S		S	
		%		&		,	
		%		&		,	
		S		S		S	
		S		S		S	
		S		S		S	
		&&		&		&	
		&&		&		&	
		%ž*+ " SS		&&ž, S, "+S		S	&&ž(, "+S
		S		%' ž& (" SS		S	%' ž& (" SS
		%ž*+ " SS		% (žS(&' +S		S	%) ž+&&+S
) ž*+ ' ",)		%žž(%%%		&&ž(***&	% ž ' ' %*S
) ž*+ ' ",)		%žž(%%%		&&ž(***&	% ž ' ' %*S
				&			' -

教 育 課 程 等 の 概 要																	
(日本文学部日本文学学科)																	
科目区分	授業科目の名称	配当年次	主要授業科目	単位数			授業形態			基幹教員等の配置					備考		
														基幹(助手を除く) 教員			
総合科目	ブッダの教え	1前	○	2			○				1						
	法然上人の思想と生涯	1後	○	2			○				1						
	総合基礎演習Ⅰ	1前	○	1				○		1	1	1					
	総合基礎演習Ⅱ	1後	○	1				○		1	1	1					
	小計(4科目)	—	—	6				—		1	1	1					
基本科目	必修科目(10単位)	英語Ⅰ	1前		1			○							1		
		英語Ⅱ	1後		1			○							1		
		英語コミュニケーションⅠ	1前		1			○									
		英語コミュニケーションⅡ	1後		1			○									
		健康スポーツ科学Ⅰ	1前		1			○							1		
		健康スポーツ科学Ⅱ	1後		1			○							1		
		人権と社会	1前		2			○							1		
		情報処理	1前		2				○						1		
		選択科目(8単位以上)	日本語表現法	1前			2			○			1				
			こころの科学	1前			2			○						1	
	自然科学Ⅰ(生物)		1前			2			○						1		
	自然科学Ⅱ(化学)		1後			2			○						1		
	くらしと法律(日本国憲法)		1後			2			○						1		
	社会学概論		1前			2			○						1		
	消費者教育		1後			2			○						1		
	ジェンダー論		2後			2			○						1		
	国際理解		1前			2			○						1		
	京都の歴史		1後			2			○		1						
	中国語Ⅰ	2前			1				○					1			
	中国語Ⅱ	2後			1				○					1			
産官学連携実践	1後			2			○		1								
インターシブ	2前			2			○		1								
小計(22科目)	—	—	10	26	0		—		2	1	0	0	0	14			
学部基幹科目	日本文学総論Ⅰ	1前	○	2			○			1							
	日本文学総論Ⅱ	1後	○	2			○			1							
	国文学概論	2前	○	2			○				1						
	日本史概説	2後	○	2			○				1						
	小計(4科目)	—	—	8	0	0		—		2	1	1	0	0			
学部必修科目	地域文化論	1後	○	2			○							1			
	京都文化論	2前	○	2			○				1						
	キャリア教育	2前		2			○							1			
	文献講読	3前	○	2			○			1	1	1					
	日本文学演習Ⅰ	2前	○	2			○			3							
	日本文学演習Ⅱ	2後	○	2			○			3							
	卒業演習	3後～4後	○	6			○			3	1						
小計(7科目)	—	—	18	0	0		—		4	2	1	0	0				
歴史文化科目群	観光文化フィールドワーク	2前			2			○						1			
	仏教文化史	2後			2			○			1						
	服飾文化史	2後			2			○									
	京都の歴史学	2後	○		2			○			1						
	芸能文化史	2後			2			○						1			
	仏教文化演習	3前			2			○			1						
	アジアの歴史と文化	3前			2			○						1			
	寺社の歴史	3前			2			○			1						
	芸能文化演習	3後			2			○						1			
	芸能文化フィールドワーク	4前			2			○						1			
	日本文学特講Ⅰ	3前	○		2			○			1						
小計(11科目)	—	—		22			—		1	2	0	0	0	4			

発展科目	表現文化科目群	日本語史	1後	○		2		○													
		日本文学概論Ⅰ	1後			2		○						1							
		日本文学概論Ⅱ	2前			2		○				1									
		国語学Ⅰ	2前			2		○						1							
		国語学Ⅱ	2後			2		○						1							
		日本文学史	2前			2		○						1							
		日本文化と英語	3前			2		○											1		
		書道Ⅰ	3前			2		○											1		
		書道Ⅱ	3後			2		○											1		
		児童文化	4前			2		○					1								
		日本文化学特講Ⅱ	3前	○		2		○				1									
		小計(11科目)	—	—		22		—				1	1	2	0	0	2				
		選択科目	京都文化科目群	京都と文学(古典)	1前			2		○					1		1				
				京都と文学(近現代)	1後	○		2		○											
				京都の美術史	2後			2		○											1
京都文化演習	2前					2		○	○			1									
京都の祭礼・年中行事	2前					2		○											1		
京都観光論	3前					2		○											1		
京都の文化財	3前					2		○											1		
京都文化フィールドワーク	3前					2		○	○			1									
茶道・華道・香道	3後					2		○											1		
京都の伝統工芸	3後					2		○											1		
日本文化学特講Ⅲ	3前			○		2		○				1									
小計(11科目)	—			—		22		—				2	0	1	0	0	4				
地域・和食文化科目群	地域・和食文化科目群			風土と文化	2前			2		○											1
				比較文化論	2後			2		○											1
				和食の基礎	3前			2		○				1							
		地域文化演習	3前			2		○	○										1		
		和食学	2後	○		2		○				1									
		民俗文化	3後			2		○											1		
		和食と環境	3後			2		○				1									
		民俗文化演習	4前			2		○	○										1		
		和食文化演習	4前			2		○	○			1									
		日本文化学特講Ⅳ	3前	○		2		○				1									
		小計(10科目)	—	—		20		—				2	0	0	0	0	4				
		現代文化科目群	現代文化科目群	循環型社会論	1後			2		○											1
				マンガ・アニメ・ゲーム文化	2前			2		○											1
				コミュニケーション論入門	2前			2		○											1
				住居文化	2前			2		○											1
サブカルチャー	2後					2		○											1		
多文化共生論	2後					2		○											1		
デジタルプレゼンテーション	3前					2		○											1		
コミュニケーションと心理	3前					2		○											1		
男女共同参画社会論	3後					2		○											1		
日本文化学特講Ⅴ	3前			○		2		○					1								
小計(10科目)	—			—		20		—				2	1	0	0	0	6				
				教育の基礎と制度(中高・栄養)	1後			2		○											1
				道徳教育論(中・栄養)	1後			2		○											1
				教職論(中高・栄養)	2前			2		○											1
				特別支援教育(中高・栄養)	2後			2		○											1
		総合的な学習の時間(中高・栄養)	3前			2		○											1		
		教育の方法と技術(ICT活用含む) (幼・小・中高・栄養)	3前			2		○	○										1		
		教育課程総論(中高・栄養)	3前			2		○											1		
		教育心理学(中高・栄養)	3後			2		○											1		
		特別活動(中高・栄養)	3後			2		○											1		
		生徒・進路指導論(中高)	3後			2		○											1		
		教育相談(中高・栄養)	4前			2		○											1		
		日本語文法	1後			2		○											1		
		古典文学講読	3後			2		○					1								
		漢文学Ⅰ	2後			2		○				1									
		漢文学Ⅱ	3前			2		○				1									
中等教科教育法Ⅰ(国語)	2後			2		○											1				
中等教科教育法Ⅱ(国語)	3前			2		○											1				
中等教科教育法Ⅲ(国語)	3前			2		○											1				
中等教科教育法Ⅳ(国語)	3後			2		○											1				

免許資格科目	教育実習事前・事後指導(国語)	3前後			1		○			1					
	教育実習 I (国語)	3後			2		○	○		1					
	教育実習 II (国語)	3後			2			○		1					
	教職実践演習(国語)	4後			2		○			1					
	図書館概論	1後			2	○							1		
	図書館サービス概論	2前			2	○							1		
	情報サービス論	2前			2	○							1		
	児童サービス論	2前			2	○							1		
	図書館情報資源概論	2前			2	○							1		
	情報資源組織論	2前			2	○							1		
	図書・図書館史	2前			2	○							1		
	図書館基礎特論	3前			2	○							1		
	図書館制度・経営論	3後			2	○							1		
	図書館情報技術論	3後			2	○							1		
	情報サービス演習	3後			2		○						1		
	情報資源組織演習	4後			2		○						1		
	博物館概論	2前			2	○			1						
	生涯学習論	1後			2	○			1						
	博物館資料論	2後			2	○							1		
	博物館展示論	3前			2	○							1		
	博物館資料保存論	3前			2	○							1		
	博物館教育論	2後			2	○							1		
	博物館経営論	3後			2	○							1		
	博物館情報・メディア論	3後			2	○							1		
	博物館実習	4前			3			○		1			1		
	小計(44科目)	—	—			88				2	0	2	0	0	16
	合計(134科目)	—	—	42	132	88	—			5	3	2	0	0	46
	学位又は称号	学士(日本文化学)			学位又は学科の分野				文学関係						
	卒業・修了要件及び履修方法								授業期間等						
	総合科目6単位、基本科目18単位、発展科目100単位(但し、学部基幹科目8単位、学部必修科目18単位)を修得し、124単位以上修得すること。								1学年の学期区分			2期			
									1学期の授業期間			15週			
									1時限の授業の標準時間			90分			

授業科目の概要				
（日本文学部日本文学科）				
科目区分	授業科目の名称	主要授業科目	講義等の内容	備考
総合科目	ブッダの教え	○	仏教の起源である開祖ブッダの時代に遡り、彼の生き方とその教えを中心として概説することにより、ブッダが残した「宗教真理」が我々の心の糧として、我々の生きる意義を示していることを理解させる。「宗教とは何か」「仏教成立の時代背景」「ブッダの生涯」「ブッダの教え」というテーマの下に、宗教観、仏教という宗教誕生の必然性、仏教の開祖ブッダの生涯、ブッダの教説（四諦説・縁起等）を概説する。建学の精神や仏教の宗教真理である「苦悩」および仏教の宗教真理である「縁起」の理念を自らの問題として理解出来ることを目的としている。	
	法然上人の思想と生涯	○	浄土宗の開祖である法然上人の生涯とその教えを中心として学ぶことにより、日本仏教の改革者として現れる法然上人の「生き方」と「思想」から、我々人間としての在り方を考える。「浄土教とは」「法然上人の生きた時代」「法然上人の生涯」「法然上人の教え」という4つのテーマの下に、浄土教、法然上人出現の必然性、浄土宗の開祖法然上人の生涯、法然上人の教説（本願念仏・浄土往生等）を内容とする。積善の生涯と思想、大乘仏教の概説、日本への仏教の伝来、日本仏教の特色、法然上人の誕生と出家、修学、「選択本願念仏」の概説、弟子について、入滅、専修念仏教団の展開について概説することをその内容とする。	
	総合基礎演習Ⅰ	○	何を身につけたいか、何を学びたいか、どのような学生生活を送りたいか、各学生が考える機会を備えている。他の学生と考えを交流し、相互理解を深めながら、各学生の学びの方向性を明確にする。発表資料の作成方法を学んで発表し、プレゼンテーション能力を身につける。また、レポート作成の方法を学んで、実際にレポートを作成し、意見を主張する技術を習得する。大学での学習入門用テキストを用い、受講、レポート、プレゼンテーション、論文執筆などの具体的方法を学ぶ。また、本学で作成した共通テキストを参考書として使い、インターネットリテラシー、ICTを使った学習支援などについて学ぶ。社会人基礎力（ジェネリックスキル）に関するアセスメントプログラムも使って、学生の強み、弱みを可視化して学びの基礎とする。	
	総合基礎演習Ⅱ	○	大学生活に必要な、プレゼンテーションの方法、資料作成の方法、レポート作成の方法について学ぶ。プレゼンテーションの方法は、個人あるいはグループとし、適宜、アンケート調査を実施したり、文献調査を行ったり、インターネットの情報を収集したりして、プレゼンテーションに必要な資料を作成する。また、その発表を期末レポートにまとめ、2年次以降の学びにつなげる。前期の学びを基に、夏季休暇中にレポートを課し、その成果を発表させる。グループワークで企画を立て、役割分担に基づいて個人が活動を行う。学術書等の紙媒体からの資料検索の実践ならびにインターネットを中心とした資料検索の実践を行って、客観性を確保しながら執筆者（発表者）の解釈を加えるという研究の基礎を実践的に学ぶ。	
	英語Ⅰ		英語のツールとしての使用は英会話に限らず、メールやSNS等のやり取りも多い。この授業では、リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの4領域にわたる総合的な英語コミュニケーション力の基礎を養成する。とりわけ速読型のリーディングとリスニングに重点を置き、それを補完する形でスピーキングとライティングの学修を行う。簡単な会話のディクテーションと音読、ペアワークを含め、授業を行う。予習をしていることを前提にテキストの内容確認と練習問題を進める。基本5文型を中心とした英語の知識を獲得するとともに、英語のアクセント・リズム・ピッチの反復練習を行い、伝わる英語力を身に付けることを目標とする。	
	英語Ⅱ		リーディング、リスニング、スピーキング、ライティングの4技能において総合的な英語コミュニケーション力の基礎を養成する内容である。とりわけ速読型のリーディングとリスニングに重点を置き、それを補完する形でスピーキングとライティングの学習を行う。ペアワークなどを行いながら授業を進めることによって、テキストの内容確認と練習問題を実施する。 ①英語基本5文型を中心とした基本的知識を獲得することができ、初心者用テキストの90%以上を把握し、与えられた質問に英語で答えられることが授業全体の目標である。さらに、②テキストの音声ファイルをダウンロードしnative speakerの話し方を模倣し、英語のアクセント・リズム・ピッチを反復練習することで発音が正確にできるようになること、③英語四技能を段階的に修得することができることを授業の内容とする。	

英語コミュニケーションⅠ		<p>グローバル化が進み、外国語を母語とする人々と交流する機会も多くなってきている。英語をツールとして交流する機会も多いと推測する。この授業では、会話文と文法の学修を通して、既習の英語表現を使用し、自身や日常について平易な英語でコミュニケーションが取れるようになることを目標とする。文法や正確さのみにとらわれず、聞き返しや言い返しなどのコミュニケーション・ストラテジーも取り入れ、意思疎通を第一の目的とした練習も行う。多読といわれる英語の本読みを行い英語の摂取量を増やすとともに、Yomiyasusa Level 0.7程度の英語本を、英語のまま理解できるようになることも目標とする。ペアワーク、グループワークを多く取り入れた授業を行い、検定試験の練習問題にも取り組む。</p>	
英語コミュニケーションⅡ		<p>英語コミュニケーションⅠに引き続き、自身や日常について平易な英語でコミュニケーションが取れるよう、英文作成と会話文を中心に学修する。多読といわれる英語の本読みと、検定試験の練習問題にも取り組む。ペアワーク、グループワークを多く取り入れた授業を行って、次の内容を修得することを目的としている。 既習の英語表現を使用し、自身や日常について7往復程度の会話文で表現できる。Graded Readerの読みやすさレベル0.8～1.1程度の英語本を英語のまま理解し、あらすじを伝えることができる。新出単語の50%以上を覚えていく。</p>	
健康スポーツ科学Ⅰ		<p>運動活動が心身に及ぼす効果と運動活動の継続法について理解を深める講義を行う。さらに、実技では各種スポーツがどのような運動特性に該当するかについて理解するとともに、ルールを理解し基本的な技術の習得により、生涯に亘り日常的に運動・スポーツを行う態度と能力を養う実技を行う。また、体力測定を実施し、自己の運動・スポーツ実践状況の検討を加え、レポートにまとめる。実技は、バドミントン、バレーボールを用い、基本技術、戦術、試合の3項目によって評価する。</p>	
健康スポーツ科学Ⅱ		<p>講義受講時と各種スポーツ実践時の気分と心拍数を測定し、運動活動が心身に及ぼす影響について検討する。また、健康の保持増進を目的としたスポーツの実践をおおして、適切な運動強度による運動・スポーツを生涯に亘り実践する意義について理解する。 スポーツ基本法には、「スポーツは、心身の健康の保持増進にも重要な役割を果たすものであり、健康で活力に満ちた長寿社会の実現に不可欠」であると明記されており、本授業を通じて、生涯にわたるスポーツ継続の方法について学生自らが考える機会とする。さらに、運動習慣を身に付けるために必要な心理状態についても説明する。 スポーツ実技は、バスケットボール、卓球を用い、基本技術、戦術、試合の3項目を実施して評価する。</p>	
人権と社会		<p>人権について考えることは、1人ひとりのいのちについて考えることであり、いのちは誰もが等しく尊いものであることを理解する。高齢になっても、障害をもっても、病気に罹患しても、存在することの価値は、すべてに等しく大切なものであること、ひとりひとりの人権が尊重されることにより、自己肯定感が生まれ、共感的な人間関係が築けることができる「共に生きる社会」を目指すために、本講義では、社会的現象から人権について具体的に考え、グループワークで議論し、多面的な視点をもって、人権を尊重する社会について考察する思考力を持つことを目指す。後半は、ハンセン病療養所の歴史について、人権とは何かについて具体的に学ぶ。</p>	
情報処理		<p>現代は、パーソナルコンピュータを介した記録や情報検索などが日常的に行われ必要不可欠となっている。そこで、コンピュータを用いた基本的な情報活用能力を習得するため、文章編集ソフト、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトなどの使い方や活用方法、インターネットを用いた情報検索などについての実習を行う。インターネットや情報機器を使用するにあたっての注意事項についても併せて学習する。演習データの提供や提出はICTを活用して実施する。 Microsoft Wordによる文章入力・整形、図表の作成・挿入などの操作、Microsoft Excelによるデータ入力、関数を用いた計算、グラフや表の作成・整形、Microsoft PowerPointによるスライド作成、図表の挿入・整形などができ、情報を探索し、分析・評価・整理、アウトプットができることを目指す。</p>	
日本語表現法		<p>大学での学びに必要な基礎的な日本語表現の方法を学び、調査した内容や自分の考察などを文章にし、口頭で発表できるようトレーニングを行う。毎回の課題では、文章作成や口頭発表の原稿作成などを行い、相互添削することによって自己覚知を促す。教科書をベースに授業を進めることで、授業時間以外にも文章作成の基礎的技術が確認できる。日本語の基礎的な知識、紹介文や意見文を書くこと、ディスカッションやディベートの方法を理解し、実践すること、調査結果や考察をレポートにまとめ、口頭で発表することができるの3要素を目標として授業を進める。対立項を意識した論理展開、スクリプトの作成、根拠を示しながら主張する意見文の作成、調査年度の異なる統計資料を比較して文章化することなどを授業で行う。</p>	

基本科目

選択科目

<p>こころの科学</p>		<p>心理学が、人間の心の働きと行動を理解するために、どのような研究をおこない、その結果何が明らかになってきたのかについて講義を行う。視聴覚資料や紙媒体の資料も用い、主に、実験系の心理学によって蓄積されてきた基礎心理学の領域での知見を取り上げる。資料の内容を参考に、心の働きについて、学生自身が考察した内容を通して考えた内容をまとめるレポート課題によって評価する。記憶、言語、思考について、それぞれの種類と発達の変化を説明し、後半は、行動、知能、感情、パーソナリティ、認知について学ぶ。</p>	
<p>自然科学 I (生物)</p>		<p>生命活動の構造の単位である細胞、その活動である代謝および体内環境の維持など生物に関する基礎的知識について学ぶことにより、生体について深く理解することを目的とする。高校生物を履修していない者を対象としており、生物に関する基礎的事項や、日常生活における生命科学における情報を講義することによって、今後の学びの土台となることを目標にする。糖質、脂質、ミネラル、ビタミン、タンパク質、DNA、細胞分裂、免疫など言葉としてなじみのある内容を科学的に講義する。授業はレクチャーを行った後、理解を深めるためICTを活用した振り返りテストを実施することで日常の評価を行い、定期試験の筆記試験によって総合評価を行う。</p>	
<p>自然科学 II (化学)</p>		<p>自然科学の基礎である化学の基礎的な知識を修得することによって、関連する生化学、栄養学、食品学等の科目の学習、実験実習が容易になる。生化学、栄養学、食品学等を学びの中心にしない学生にとっても、健康管理、日常生活の食品摂取、消費活動などあらゆる場面で化学の知識が有用であることを説明して、授業を行う。高校の化学の復習を主とした内容とし、理解を深めるためふり振り返り小テストを行って評価を実施する。前半、中盤、後半と分け、原子・分子・イオンについて前半講義を行い、物質の状態変化・物質の化学変化・酸と塩基・水素イオンなどについて中盤講義を行い、中和反応・酸化と還元などを後半に行う。</p>	
<p>くらしと法律(日本国憲法)</p>		<p>憲法や法律が、基本的な権利や国の根幹について定めている重要な法であることを理解することを目的に講義を行う。この講義では、身近な人権の例や、社会生活の中で目にしうる法律問題を取り上げながら、憲法の基本的な考え方を学んでいく。幸福追求権と好評の福祉、法の下での平等、表現の自由、経済的自由と労働権、生存権と社会保障、教育と学問、犯罪と刑罰、財政と税金、行政と地方自治、参政権、国会、憲法改正など広範にわたるが、。SNS、誹謗中傷、子どもの権利、確定申告などの事例を用いて、いずれも身近な問題として扱う。理解度を確認するために、ICTを使用した小テストを行い、定期試験と合わせて評価する。弁護士、産業カウンセラーとしての活動も、あわせて紹介する。</p>	
<p>社会学概論</p>		<p>人間関係のありかたを視点に、「何故、我々は悩むのか?」という日常生活の身近な問題を出発点として、映像資料を用いながら授業を進める。まず、人の中で生じる相互作用についての考察から初めて、個人の側から現代社会のありかたを捉えてる。次に、グローバル化という大きな社会現象から現代社会のありかたを捉えることを通じて、その現象によって個人のありかたはどのように変わったのかを捉える。これらのことを通じて、現代社会のありかたについて考察する。人間の相互作用とその類型、人間関係の変化と「絆」、組織と個人、グローバル化という社会学の課題を概論的に進める。</p>	
<p>消費者教育</p>		<p>消費者教育は、2012年の「消費者教育の推進に関する法律」が制定されて以来、その在り方を変化させている。賢い消費者としての適切な行動に繋がる知識を習得し、具体的な事例を通して理解を深め、実践的能力を養うことを目的としている。受講生同士のディスカッション、ディベートなども行って身近な消費について考える。消費者政策の展開、国・地方の消費者行政(消費者庁や国民生活センター)、クーリングオフなどの契約と消費者トラブル、現金以外の決済方法が一般化する中でキャッシュレスと消費者信用、中学生期・高校生期の消費者教育について説明する。</p>	
<p>ジェンダー論</p>		<p>所与の条件として日常的に意識されないことが多い「女性である」「男性である」ということが及ぼす影響について考える。人は生まれた瞬間から女性または男性いずれかのカテゴリーに入れられ、文化的・社会的にふさわしい行動が期待される。本講義では、どのような過程を経て、女性、男性になっていくのかを「社会化」という視点からとらえ、「ジェンダー(文化的・社会的性差)」を相対化することを試みる。そして、ジェンダーが現実の生活の中で含んでいる課題について学生の意見も交えて検討する。発達に合わせて、「らしさ」「隠れたカリキュラム」「お姫様」「デートDV」「就労」などのキーワードを基に、多様性を尊重する生き方について講義する。</p>	

国際理解		<p>グローバル化の進む現在、世界全体が一つのシステムに統合されつつあるように見える局面がある。しかし、今なお国家、あるいは近隣国家群（地域）において、それぞれの風土、歴史、民族、宗教、文化などに由来する独自性が息づいている。本講義ではそれらを地域別に概観し、世界の多様性に関する知識を得て、諸外国に対する理解を深めることを目的とする。なぜ戦争が起きるのか？現在の国際情勢に関する知識をもとに考える。国の定義、国境、民族、言語などの関係から始め、「東アジア」「東南アジア」「オセアニア」「インド・イスラム」「サハラ以南アフリカ」「中南米」「北米」「ヨーロッパ」と地域ごとに紹介する。終盤では、「戦争」と「紛争」について考える。</p>	
京都の歴史		<p>政治・文化・宗教の中心であった京都の歴史と文化を、史資料を用いながら理解を深めていく。その開始を、平安京の成立とし、宗教空間都市の京都とはなにか、平安貴族の日記等を用いて、衣食住の生活様式の理解に加え、仏教信仰についても講義する。中世の京都の歴史として、鎌倉・室町時代の京都の歴史と文化について考えたのち、織豊時代の京都大改造について学ぶ。当時の京都の生活を今に伝える貴重な資料として国宝・重要文化財に指定されている『洛中洛外図屏風』を用いて描かれた京都について学ぶ。明治期以降、首都東京が誕生したことによる京都の近代化への影響について講義し、今日の伝統産業の課題を取り上げる。</p>	
中国語Ⅰ		<p>本授業では、中国語を耳と口で学ぶことに重点を置き、中国人と初歩的なコミュニケーションがとれる能力を身につけることを目指す。授業は演習形式で行う。学期末には中国語によるプレゼンテーションにより、その学習成果を確認して評価を行う。また適宜映像資料などを鑑賞し、中国文化や中国の国内事情への理解も深めることを目的としている。「発音」（子音、複母音）、「発音」（声調変化、よく使う表現など）、「人称代名詞、疑問文」、「動詞、語気助詞など」中国語の基本を学ぶ。その後、「形容詞述語文、疑問詞など」「教詞、量詞など」を学んで基本的な単語や文法を習得していく。「方位詞、存在を表す“在”」「時間の言い方、連動文など」「完了、変化“了”など」を学ぶことによって、会話の成立を目指す。</p>	
中国語Ⅱ		<p>本授業では「中国語Ⅰ」の学習成果をふまえ、引き続き中国語を耳と口で学ぶことに重点を置き、中国人と初歩的なコミュニケーションがとれるようになることを目標とする。授業は演習形式で行い、学期末には中国語によるプレゼンテーションにより、その学習成果を評価する。進行形式は、中国語Ⅰと同様である。適宜映像資料などを鑑賞し、中国文化や中国の国内事情への理解もさらに深め、中国への興味を喚起する。会話に必要な「助動詞、“会”“能”“可以”」「進行“正在～呢”、持続“～着”」を学び、補語を詳しく説明し、会話を可能にする。それは、結果補語、比較A“比”B～、“是～的”構文、二重目的語、方向補語“来”“去”についてである。文章形式として、“把”処置式の文、主述述語文、存現文、受身、使役、複文と学びを進める。</p>	
産官学連携実践		<p>主に夏季休暇中の一般企業へのインターンシップを通して社会人に向けての心構え、職業意識の形成を培うことを目的としえる。また、インターンシップや事前事後の講義形式の授業を通して、自分がどんな仕事や職種、業界に向いているかという職業適性を把握するために授業を展開する。特に、外部講師を招いての業界研究や企業見学では、学生自身が質問を積極的に行うために、事前準備を充実させる。また、就職活動に向けて、個人ごとに就職希望先企業の研究を行い発表することによってプレゼンテーション能力も高めることができる。</p>	
インターンシップ		<p>主に春期休暇中の一般企業への産官学連携実践インターンシップを通して社会人に向けての心構え、職業意識の形成を培うことが目的である。また、インターンシップや講義を通して自分がどんな仕事や職種に向いているかという職業適性を把握する。また、就職活動に向けて個人ごとに就職希望先企業の研究を行い発表する。産官学連携実践の報告会によって、学びを振り返り、希望就職先を検討して、事前研究を行う。学生が順に、希望就職先の企業研究の成果をまとめて研究発表を行う。その後、会社見学先について事前学習を行って、理解を深める。そして、会社見学の実施、見学の振り返り、学んだことについてのレジュメ作成とP D C Aサイクルを活用した学びを実践する。企業従業員による講演、経営者による講演も実施して、就職への関心を高める。</p>	
日本文化総論Ⅰ	○	<p>日本文化は、前近代の文化が近代化の過程で変化しながら形成されてきた。本講義では、西洋人が江戸時代の文化をどのように捉え、近代化の過程で日本は西洋文明を取り入れながらどのような文化を形成してきたのかを資料からたどり、近代化と日本文化形成の関わりを概説する。資料として、幕末・明治初期に来日した外国人の記録、日本人の西洋見聞記を用い、記述からどのような文化の形成を目指したのかを読み取る。さらに、19世紀から20世紀に開催された内国博覧会および万国博覧会の記録と出品物を概観し、日本文化形成の過程と特色を考察する。</p>	

学部基幹科目

日本文化総論Ⅱ	○	6世紀半ばに仏教が大陸より伝来して以降、仏教は日本文化へ大きな影響を与えてきた。仏教を源とする文化は、文学や美術をはじめ、思想や宗教観など、現代の日本でも継承されている。以上のような観点から、仏教文化を中心とした日本文化の変遷を、古代から近現代までを対象に、歴史学だけではなく文化人類学や社会学の方法論を用いて日本文化の系譜を考察し、日本文化論へのアプローチ方法を探究することを目的とする。	
国文学概論	○	国文学の概要を学ぶ授業では、高等学校等の国語教科書（言語文化・文学国語）に掲載されている近代文学作品を中心に取り上げる。前半は、明治・大正期の文学史を概説し、日本文学の背景にある思想や歴史を学ぶ。後半は、批評理論を概説し、文学作品を論理的に読む力を身に付ける。近代小説の誕生から、森鷗外、自然主義文学と田山花袋、反自然主義と夏目漱石の西洋観、白樺派の文学と志賀直哉、新感覺派とプロレタリア文学、芥川龍之介「羅生門」の分析、葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」の分析を行う。	
日本史概説	○	さまざまな日本文化を理解するうえで、日本史の全体像や各時代の特徴を理解することは欠かせない。本講義は、古代から現代までの日本史の流れを理解するため、主に政治的な観点から通史的に解説する。中学・高校にありがちな暗記科目として日本史ではなく、氏姓制、律令制、摂関政治、院政、武家政治、藩閥政治、立憲政治など、政治体制や社会体制の変遷を軸として各時代の特徴を捉え、日本史の全体像を把握・理解できるように解説する。また最新の研究に基づき、各時代における重要な歴史的イベントや事象も取り上げて解説し、学術的な日本史学の視点にも触れる。社会の歴史の変遷を整理することを通じて、過去を現代の価値観ではなく、現代とは異なる異文化の社会として観察する歴史的思考力も養う。	
地域文化論	○	人々が生活を営む中で、産み出されてきた慣習や伝統などの文化は、その背景には歴史や自然環境さらには、周辺の地域からの影響など様々な要因によって形作られている。そこで、本講義では地域社会の文化が、どのような影響のもとに形成されてきたのかについて、京都やその周辺の地域の例について歴史や地理的な環境を踏まえた上で解説する。それを踏まえて受講生自身の経験に基づく文化的な行動や慣習の背景が、どのようなものであるのかを考察してもらうために、図書館に所蔵されている資料WEB、さらには受講生の家族や友人に話を聞いて自信を取り巻く環境について調べて、発表をしてもらう。その発表内容を踏まえた上で、どのような点について留意すれば地域の文化がどのような背景を有しているのかについて、より良く分析することができるのかについて講義をしていく。	
京都文化論	○	現在における京都の文化には、近世に形成されたものが多く存在する。特に文化都市・観光都市としての側面は、近世にその源流があるといわれてよい。そのため京都文化を理解するためには、近世京都の社会と文化を知ることが極めて重要である。本講義は、近世京都における歴史的文化に焦点を当てて、その実態を解説する。具体的には、近世京都の「名所」や「名産」、近世に形成された歓楽街、御所周辺の公家町などについて解説する。さらに全国から遊学生が集まった医学や漢学の私塾をはじめ、さまざまな学芸の隆盛や、西陣織や京扇など伝統産業の盛衰についても解説する。また江戸・大坂など他都市にはない大きな特徴として、京都のみに存在した近世朝廷の宮廷文化や儀式についても解説する。現在の京都文化を考える前提として、近世京都に関する知見を広げることが目標とする。	
キャリア教育		現在の雇用・労働を取り巻く環境は大きく変わりつつあり、個人の選択肢も多様化し、それに伴ってチャンスとリスクも拡大する傾向にある。同時に、企業組織と従業員個人の関係も変化してきており、かつてのような「会社任せ」ではなく、自ら主体的にキャリアをデザインしながら、その目標に向かって学習と経験を積み重ねていくことが必要になっている。そのためには大学生活の中で学びや経験を積み重ねながら、働き方や生き方を模索し、意志決定していくことが必要となる。ビジネス場面で必要とされる文書表現などの基礎的事項やキャリア理論を通じて自分のキャリアを切り拓く手がかりを得る。「考える」ことが基本であり、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーションを含んでいる。	
文献講読	○	大学教育における目標である主体的な思考力を身に着けるためには、基本となる文献を自ら発見し、精読し、要約、整理し、他の文献とも比較しながら、自分なりに評価することが必須である。この授業では、まず、自分が関心のあるテーマについて基本文献を検索して見つける方法を習得することから始める。次に、基本文献の図表を読み、要約して、要旨を発表する。そして、その過程で、文献の問題点を自分なりに見つけることを目標とする。また、他者の発表を聞き、その発表の問題点を指摘する力を身に着けることも授業の重要な目標である。これにより、文献を読解する力、課題を発見する力、プレゼンテーション能力を養うことができる。	

学部必修科目

日本文化学演習Ⅰ	○	日本文化の持つ多様で複雑な文化形成について、時代、地理、社会階層など様々な視点から学ぶ。日本の歴史は、その大半が京（京都）、江戸（東京）の歴史であり、為政者の権力の拡大と地方の服従の歴史でもある。その過程で、文化という行動モデルは日本全体に広がった。伝統文化と呼ばれるものがある一方で、日常の行動様式や価値観も文化である。このような広範な「文化」の学びをすすめて、学生個人が専門性を高め、それぞれの興味関心を深めることができるように、文化にまつわるキーワードを取り上げ、発表資料にまとめ、質疑応答、文献検索の方法などの習熟を目指す。	
日本文化学演習Ⅱ	○	日本文化学演習Ⅰをふまえて、学生が自身の興味関心に基づいてより個別的・具体的なテーマを定め、深く調査研究をすすめる。自身の調査テーマが、日本文化においてどのように位置づけられるのかについて文献などから学び、個人研究を相対化するための視座をもつ。春学期と同様に、入門的な書籍を参考に、身近な課題、地域の取り組みを題材にした調べ学習も行う。発表と討論を重ね、調査研究の基礎を習得する。この講義では、前期と同じく博物館、資料館、学外図書館などの利用法を学んで、文献、史料、資料の扱い方も復習する。さらに、この講義では各自の集大成として卒業論文に向けたテーマ設定を各自に課し、3年生の卒業演習の選択に臨む。	
卒業演習	○	日本文化についての学びの集大成として、3年後期、4年前期、4年後期の3期にわたって行う。学生は、教員の指導の下、問題意識を設定し、卒業論文の執筆に向けて、先行研究や関連資料を収集し、研究方法・研究手続き・分析・考察の方法・結果のまとめ方等について学ぶ。ゼミでの研究発表・意見交換・議論・個人指導を通して、卒業研究のテーマを確定する。同時に、課題探求力、問題解決力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力を高めることを目指す。4年生前期に「論文題目」を提出させ、後期に卒業論文を提出したうえで、論文審査を課す。	
観光文化フィールドワーク		京都市及び近隣の観光地（奈良市、大津市、宇治市等）を対象に、関係者へのインタビュー、現地実査を通じ、観光資源となる文化財、景観、伝統産業、祭り、食、などのテーマを、地域の歴史的な文脈の下に調査・分析し、観光まちづくりにつながる実践的な提案を行う。班別のグループワークを基本とし、課題設定・調査設計・調査、及びプレゼン資料の作成を自ら行い、一連のプロセスを通じて、観光文化に関する多様な知識を身につけるとともに、課題発見力、調査・分析力、提案力を高める。	
仏教文化史		当授業においては、日本伝来以来、私たちの生活に根づく仏教を文化史の立場から講義する。インド発祥の仏教は、シルクロードを通り中国に伝来しそこで漢訳される。漢訳された仏教は東アジア一円に広まり、日本にも伝来する。日本において定着した仏教は独自の展開を遂げ、私たちの生活にも馴染むものである。そのような日本古来の仏教が日本の文化に与えた影響について考察し、広く知られた既知の仏教文化と、知らず知らずのうちに生活に浸透している未知の仏教文化について講義を行う。	
服飾文化史		日本の服飾文化の歴史を学ぶ。飛鳥・奈良時代、平安時代、鎌倉・室町時代、安土・桃山時代、江戸時代、近代から現代のそれぞれの時代の服飾文化を概説する。授業では、文献資料や実物遺品の映像を示しながら各時代の服飾品の特色を解説する。服飾は、前近代社会においては身分・階級や着用者の豊かさを表すものとして展開され、社会の変化にともなって多様な服飾文化が生みだされてきたことを理解する。また、グローバルな現代社会において、日本的な服飾文化の特色がどのように発信され、現代的な服飾文化をうみだしているのかについても概説する。	
京都の歴史学	○	京都の歴史は平安京に淵源があるが、その後の変遷を経て、豊臣秀吉による京都改造以降の姿、すなわち近世の京都が今日の直接的原型となっている。近世三都の一つとされた京都は、政治的・商業的中心としての地位を江戸・大坂に譲ったものの、古代からの歴史を持つ天皇・公家・地下官人らによる朝廷社会が存在し、他の近世都市とは異なる性質を有し続けた。本講義は、平安京から近現代まで、京都という都市の歴史を解説する。特に近世京都における、江戸幕府による町の支配構造、京都近郊との関係、近世朝廷社会の構成、朝幕関係の変化、幕末京都の状況など、近世京都の歴史的特徴に重点を置いて解説する。さらに東京奠都を経て、近現代の京都が形成されるまでを解説する。日本文化の考察を行う上で基礎となる京都の歴史について、正しく理解することを目指す。	

歴史文化科目群	芸能文化史		日本の伝統芸能と言ってもさまざまあり、その成り立ちや現況を考慮しなければ、漠然として捉えることができない。歴史的にある一時期に存在しながら現在には残っていないもの、形を変えながらも残っているものなど、伝統芸能とは何かについて整理を行う。そのうえで、本講義では能、狂言、歌舞伎、落語、さらに念仏踊りや壬生狂言といった信仰と深く関わるものなどを中心に、その歴史を学ぶことで現代日本の文化とのかかわりについて講義する。	
	仏教文化演習		本講義は、日本仏教の文化史の演習である。仏教文化の内容を概観しつつ、各自が関心のある課題を見つけ出し、それに纏わる研究史を構築し、問題解決への糸口を探る文献の探索、また問題を分析する方法について学び、仏教文化を中心とした研究方法を学ぶことを内容とする。各自が課題を意欲的に見つけ出すことを望む。先行研究（論文・著書）を読解して研究課題の設定し、その課題解決に向けての史料読解、分析、解決に至る過程を学んでいく。取り組む対象は、日本仏教の文化史に照準を当てる。	
	アジアの歴史と文化		日本との関わりを視野に入れながら、中国の歴史と文化について、時代を追いながら主に唐時代までの代表的な遺跡や出土文物をみてゆく。前半は墓葬美術に代表される世俗美術を、後半は仏教美術を取り上げ、具体的にその様相や特徴、変遷を学ぶ。具体的内容としては、中国の歴史と地理、殷墟とその美術、殷周の青銅器、始皇帝の兵馬俑、始皇帝陵の地下宮殿、漢の皇帝陵と金鏤玉衣、馬王堆漢墓と帛画の世界、吉祥と美術、雲岡石窟の開鑿、皇帝即如来思想と曇曜五窟、孝文帝の漢化政策と仏像の漢化、龍門石窟の美術、敦煌莫高窟の歴史と地理、敦煌莫高窟の早期窟（北凉～北周）、敦煌莫高窟の中期窟（隋唐）と中国の文化を学び、そこからアジア各地に伝播・派生していく文化について紹介する。	
	寺社の歴史		日本の歴史において仏教が果たした役割は極めて大きいものである。特に中世においては、荘園を集積して経済基盤を固めた寺社が担う役割は非常に強大なものである。これらは学術的に「寺社勢力」と呼ばれる。京都には古来より様々な寺院が存在することは周知であるが、日本歴史を概観しつつ、京都にある寺社の歴史をさまざまな角度から解明することを目指す内容である。なお、京都や近郊の寺院にフィールドワークを実施する予定である。	
	芸能文化演習		京都には京都独自の芸能がある。壬生寺、神泉苑、清涼寺、引接寺に伝わる大念仏狂言である。まず、その歴史、概要を文字で理解してもらおう。その後、動画で演目を確認する。可能であれば学外演習として実際の公演を見る。それぞれの講の演目の内容についても紹介し、能や狂言からの影響などを取り上げる。二つ目の京都の芸能として六斎念仏を取り上げる。これについても歴史、概要を文字で紹介した後、動画で確認をする。祇園祭が与えた影響についても考え、綾傘鉦と壬生六斎との関係についても理解を求める。最後に京都の伝わる盆踊りを紹介し、盆踊りの歴史と意味について考えてもらおう。	
	芸能文化フィールドワーク		京都の3大祭りのうちの一つである「祇園祭」について講義を進め理解を深めてもらい、7月の祇園祭に実際にフィールドワークにでてもらう予定である。祇園祭の歴史を文字と動画を用いて紹介する。それぞれの鉦の特徴の紹介、懸想品、囃子、ちまきなどについても提示する。洛中洛外図に描かれた祇園祭を知ることから京都の歴史にも興味を持ってもらおう。祇園祭の変化とその背景となる社会の動きについても講義する予定である。フィールドワークとしては、鉦町で行われるちまきへの袴付けの体験、ちまき販売のボランティアなどを予定している。	
	日本文化学特講Ⅰ	○	刀剣を佩帯する文化は世界中にある。しかし近世日本における「帯刀」は、刀・脇差の二本を腰に帯びることのみを意味し、治者と被治者を分かつ身分標識として機能していたことに特色がある。本講義は、近世社会を特徴づける「帯刀」という風俗について、その認識の歴史の変遷と意味を解説する。「帯刀」の身分標識としての価値が17世紀末に形成されること、実際には「武士」イコール「帯刀」という単純な構図ではなく、宗教者や百姓・町人などのなかに様々な「帯刀人」が存在したこと、「脇差」一本の佩帯は庶民にも広く行われていたことなどを解説する。それらの刀剣佩帯が明治初期に至り、いかなる経緯と事情を経て廃止されたのかも解説する。近世日本特有の「帯刀」を正確に理解することを通じて、近世社会や文化の重要な背景となっていた、近世身分秩序の実態と意味を考える。	

表現文化科目群	日本語史	○	日本語は、原始日本語の特徴を受け継ぎつつ、漢字・漢語の渡来により大きな変容を遂げ、外来語の影響等により今なお変化し続けている。万葉仮名、平仮名、片仮名、という日本語の変遷を、それをを用いた文学から理解し、現代の日本語に及ぼす影響についても考える。	
	日本文学概論Ⅰ		古代から近世までの日本古典文学の系譜について講述する。具体的な作品を取り上げ、成立の背景や時代性、作者の問題等について考えるとともに、他作品との影響関係や後世の受容と展開について理解を深める。和歌、中古の物語、日記文学、随筆文学、歴史物語、説話文学、上代・中古文学、軍記物語、中世王朝物語、中世の和歌と連歌、御伽草子と仮名草子、俳諧と紀行文、読本の展開、出版文化の隆盛と歴史的な背景を理解できるように、毎回のテーマを設定し、大学入学以前の学びと関連付けて説明する。	
	日本文学概論Ⅱ		この授業では、日本文化のなかでも児童文学を主に扱う。近代日本で最初の創作児童文学といわれる巖谷小波『こがね丸』は博文館の「少年文学」叢書の第1冊目である。『こがね丸』をはじめとした博文館「少年文学」叢書を読み進めるとともに、文学と絵の関係についても考察する。日本文学概論Ⅰが主に歴史的文学を多く扱ったことと比較して、Ⅱでは、現代までつながり深く、受講生にとってもなじみのある分野を学ぶことで、日本文学を概略的に理解することができる。	
	国語学Ⅰ		現代は、グローバル化と情報機器の急速な進展に伴い、ことばのありようもこれまでの歴史上類を見ない速度で変化している時代である。そうした時代にあつては、人間や社会のアイデンティティ形成の基礎となる「国語」への知見を深め、得た知見を社会生活へ応用する力を高めることが、これまでにない重要な意味を持つと考えられるこうした力を育てるため、本科目では「国語」に関する基礎知識と現代社会における言葉の現状について、音声と表記、語彙を中心に考察を深める。	
	国語学Ⅱ		現代は、グローバル化と情報機器の急速な進展に伴い、ことばのありようもこれまでの歴史上類を見ない速度で変化している時代である。そうした時代にあつては、人間や社会のアイデンティティ形成の基礎となる「国語」への知見を深め、得た知見を社会生活へ応用する力を高めることが、これまでにない重要な意味を持つと考えられるこうした力を育てるため、本科目では「国語」に関する基礎知識と現代社会における言葉の現状について、文法と社会言語学を中心として、国語教育や日本語教育の範疇に目を配りながら、考察を深める。	
	日本文学史		日本文学の時代ごとの特徴を大まかに捉え、代表的な作品や作家について基礎的な知識を身に付ける。日本文学史の区分を説明したのち、中古の詩歌、物語、日記・随筆、説話・歌謡の変遷を理解する。さらに中世の和歌・連歌、歌謡、物語・説話、日記・随筆、芸能と進み、違いを理解する。近世になっての小説、俳諧、川柳・狂歌、芸能、和歌・漢詩文といった庶民の暮らしとのかかわりを理解し、近現代に入ってから全国的に広がる、明治期文学、大正期の自然主義、耽美派、白樺派、新現実主義について学ぶ。大正末・戦前昭和にかけては世相を反映したプロレタリア文学、戦時下の文学について学び、戦後昭和の文学、高度成長期の文学について理解を深める。	
	日本文化と英語		アニメ、ゲーム、コスプレ等日本の文化は海外でも人気がある。日本で生まれた日本独自の文化が海外へ発信される時にどのように伝えられるのだろうか。英語に訳されて伝えられる日本のアニメ、英語を用いて日本文化を伝えるユーチューブ、TV番組、小説、映画などを学生に提示し、どのような文化が英語に訳され発信されているか理解してもらおう。授業内ではディスカッションを取り入れ学生の積極的参加を求めたい。最終目標としてはグループで海外に伝えたい文化を選び、パワーポイントでプレゼンをしてもらう。樽井が受け持つ他大学の留学生との交流も図りたいと考える。	

書道 I		中学校国語科書写の学習指導に必要な知識・技能・指導法について講義する。学校教育における書写では、文字を正しく整えて速く書くことができるようにするとともに、書写の能力を学習や生活に役立てる態度を育てることが求められている。本授業は毛筆の基本的用筆法の「理論・実技」の習得を目指す。基本的用筆法は、楷書・行書・平仮名・片仮名学習の要である。その実習の過程で、書写の指導法や指導計画等を学ぶ。実習は理論3実技7の割合で行う。書写の教材を中心に学習するが生活に役立てる書も学習する。	
書道 II		高校芸術科書道の学習指導に必要な知識・技能・指導法について講義する。書写の学習を基礎にして、表現活動と鑑賞活動についての幅広い学習を通して、創造的、個性的な芸術に関する資質・能力を伸ばすことが求められている。本授業は書写の正しく整えて書くことを基本とし、さらなる書写の深識を目指しながら、芸術としての表現性を学ぶ芸術科書道の学習をする。実習では書の伝統に基づき、古典の臨書や、名筆の表現を踏まえて「理論、実技」を学び、書道の指導法や指導計画等を学ぶ。書写及び書道の教材を学習する。	
児童文化		日本文化における表現領域についてこどもの果たした影響は大きい。それがたとえ子どもの姿を借りた大人向けの説話であったとしても、子どもの世界や視点を通して日本文化を見ることができる。本講義では、児童文化のなかでも、特に絵本や昔話、児童文学に注目し、子どもの本がつけられた歴史的経緯やその変遷について学ぶ。様々な時代の絵本や児童文学作品を実際に読み、自分の意見をまとめ、受講生同士で共有することを通じて、子どもにとって「良い本」とはなにか、どのような物語を子どもたちに伝えていきたいかを考えていく。	
日本文化学特講 II	○	6世紀半ばに仏教が大陸より伝来して以降、仏教は日本文化へ大きな影響を与えてきた。仏教を源とする文化は、文学や美術をはじめ、思想や宗教観など、現代の日本でも継承されている。以上のような観点から、仏教文化を中心とした日本文化の変遷を、古代から近現代までを対象に、歴史学だけではなく文化人類学や社会学の方法論を用いて日本文化の系譜を考察し、日本文化論へのアプローチ方法を探究することを目的とする。	
京都と文学（古典）		奈良時代に成立した万葉集は、すべて漢字で書かれた現存する日本最古の和歌集である。その編者とされる大伴家持の歌日記をはじめ、中国文学の影響を受けながら、日本人としての感情表現である和歌の発展が、平安時代の日記文学に結実した。本講義は、平安初期の貴族である紀貫之に焦点を当て、日本最初の勅撰和歌集である「古今和歌集」ならびに日記文学の嚆矢でありその後の日本文学に絶大な影響を及ぼした「土佐日記」を取り上げ、日本文学、特に京都と文学の関係について学ぶ。その背景には、遣唐使のもたらした漢文学と遣唐使の廃止によって華開いた国風文化、貴族政治などがあり、併せて学ぶことにより、その時代を生きた人々の生活も理解する。	
京都と文学（近現代）	○	この講義では、近代の文学者を通して彼ら彼女が京都をどのように描いていたのか、を考えることを目的とする。京都は、様々な小説やエッセイの舞台になっている。それだけ、作家に対して京都は何らかの印象を与える地であったとも言える。ここでは、特に、夏目漱石、梶井基次郎、谷崎潤一郎など京都が舞台となっている作品を取り上げ、京都の特質や、魅力について考える。または彼らの優れた視線を感じてもらいたい。これらの作品を通して京都の町や風景、風俗なども観察し、現代の京都と比較し、継続するもの、失われたものを考えたい。さらには、作品に取り上げられた京都の地についてフィールドワークを実施し、作品で書かれた当時と現代を比較したい。	
京都の美術史		京都の美術史を体系的に学ぶ。その背景である歴史、風俗、民俗など隣接諸学科も取り入れた内容で展開する。京都の美術史の流れを時代を通して理解し、思考力、幅広い教養を身に付けることを目的としている。平安時代の王朝と美意識、平安時代の仏教美術、中世期の芸術、室町時代の北山と東山の文化、さらに狩野派、琳派、円山・四条派、京都画壇について学ぶ。それ以外にも、近世の染織、京都と国宝、京都の庭園と建築、茶道から見る総合芸術など京都の美術史を多角的な観点から学ぶ内容である。	
京都文化演習		平安時代、室町時代、安土・桃山時代、江戸時代、近代、現代に生み出された京都の文化を概観し、そのなかから学生が興味を持った事象を選び、その内容や特色について調べる。さらに、取りあげた文化に関わる地域でフィールドワークを行い、有形・無形の文化財が現在どのように保存され、人々にどのように評価されているのかを調査し、発表する。長い歴史のなかで京都の地で展開されてきた様々な文化的事象について各自が主体的に情報を集め、現地で調査することにより、京都文化を理解するとともに、現代社会における歴史的文化遺産の価値や存在意義を考える。	

京都文化科目群
選択科目

京都の祭礼・年中行事		四季を通して行われるまつりや年中行事は、人と神仏とが交感する機会でもあり、また人々がふと立ち止まって過去を振り返り、自らを省みる時でもある。さらにまつりや年中行事には、それぞれの季節ごとの意味付けがなされている。春には春の、秋には秋の、季節ならではの人々の祈りや願いが込められているといえよう。春の葵祭、夏の祇園祭から秋にかけての火祭りや御火焚祭など、京都のまつりや年中行事の裏側に秘められた民俗の意味について解説する。	
京都観光論		京都は、歴史や文化、景観などの多様な魅力を誇り、国内外から数多くの観光客が訪れる都市である。同時に、オーバーツーリズムをはじめとするさまざまな課題にも直面している。今世紀の重要な産業であるとされる観光を持続可能なものとするには、観光先進都市としての京都を、多様な角度から分析し、その経験を共有し継承していくことが必要である。 本講義では、京都観光を歴史や文化の側面はもとより、広く地域経済やまちづくりの観点からも論じる。関係諸学の知識や理論に学び、観光という人類の営みの意義を受講生とともに考えていきたい。	
京都の文化財		京都の文化財についての概要と特徴を講義することにより、京都という地域に蓄積されてきた重層的な文化財の全貌を捉え、その側面から京都文化についての理解を深めることを目標とする。 具体的には、受講生の京都の文化財に関する理解・イメージを把握した後、文化財とは何かということを中心に文化財保護法との関係で説明し、その上で「庭の京都」「天皇・公家・武家の文化財」「町衆の文化財」「社寺の文化財」など幾つかのテーマを立てて文化財を紹介する。さらには、「京都の外に流出した文化財」、「造られた京都イメージ」などの文化論的なテーマも取り上げる。	
京都文化フィールドワーク		この講義は、フィールドワークを通して京都の文化を考えることに目的がある。京都の文化は、古来から発展し日本中に影響を与えていた。例えば、地方にある小京都は、京都の文化を取り入れた試みと言えるだろう。この講義では、京都の文化について京都の地からだけではなく、外部からの視線からも見てみたいので、京都だけではなく近隣の都道府県の文化からも京都を見、地方の地から京都と比較し、その影響を考察したい。そのために、京都だけをフィールドワークの地としない。また、フィールドワークについては、3回程度を予定しており、フィールドワークの前後に発表を課す。またフィールドワーク先については、例えば、京都の城郭と地方の城郭の違いのようなテーマを絞り共通の視点から実施する。	
茶道・華道・香道		「道」と付く芸術文化をその道の先導者から講義を聞き、体験を通して、人生を豊かにする「道」について学ぶ。まず、茶道について、裏千家資料館の見学・体験を通して必須の道具を学び、関係者から茶道とは何かについて学び、教養として茶の湯実践を行う。煎茶道についても、家元による講義と体験によって知識・理解を深める。さらに、華道とは何かについて未生流笹岡家元から学び、華道体験も行う。続いて、香道とは何かについて山田松香木店から学んで、源氏香や製造見学も行って理解を深める。また、書道とは何かを具体的に書家から学んで、行書楷書の実践を行う。その他にも、弓馬術についても、小笠原流から学び、「道」と呼称する様々な文化を学ぶ。真行草の極意についても、学生とともに学ぶ。	
京都の伝統工芸		京都は平安時代から江戸時代まで長きにわたり都であり続けた。そのため、都には様々な人が集まり、長い歴史のなかで独特の文化を作り上げ、その中で美術、工芸品が発展した。現在、京都には国指定の伝統工芸品が17品目あるが、京都市が74品目、京都府が33品目を伝統工芸品として指定している。工芸は産業とも深い関わりがあるため、生活の中にある工芸もその範囲とする。伝統工芸を温故知新の精神から思考力を修得し幅広い教養を身に付けることを目的としている。 具体的内容は、伝統工芸と生活について導入を行い、伝統工芸品の制度と現状について学んで、京の伝統工芸品にふれる。さらに、万国博覧会と京の工芸品についての関係を講義し、京焼と茶道具にある、形を守る精神について学ぶ。ほかに、京の造園、扇子作り、西陣織（ファブリック）、指物（世界で評価される伝統と革新の木工芸）、和傘とインテリアについてそれぞれ学びを深める。そして、伝統工芸と行政との関係についても学び、今後を展望する。	
日本文化学特講Ⅲ	○	本講義では、染織文化をとりあげる。日本では長い歴史のなかで豊かな染織文化が育まれ、そのなかでも京都では技術的にもデザインのにも優れた製品が作り続けられてきた。平安時代には貴族が用いた染織品が、室町時代から江戸時代には武家や裕福な町人層が用いた染織品が作られ、近代においては国家経済を支える産業として染織業が発展した。こうした染織文化の歴史の変遷を理解し、さらに各自が興味をもった染織品をとりあげ、その染織品が作られた社会的背景、技法や文様の特色を調べ発表する。染織文化の歴史的な発展を学ぶとともに製作された染織品について知ることにより、京都の文化の特色をより深く理解する。	

地域・和食文化科目群	風土と文化		<p>風土とは、その土地の気候や土壌などの環境と、人と暮らしの関わり合いの中で作られたことを示す概念である。個々の地域は環境に合わせて特徴のある文化が形成される。この講義では、人と自然の関係をテーマに風土と文化の考え方を学習する。風土と文化、年月を重ねる中で成熟し、時の経過と共に少しずつ変化する。前半の講義では、大学のある京都を事例とし、現在の街並みが歴史的にどう作られたのかを考える。講義中盤では、日本の異なる地域を取り上げる。環境による文化的差異、農業や漁業などの産業など、地域文化の背景を学習する。講義の後半では、国際的な風土論を紹介し、世界的な視野で風土と文化を考える。急速的なグローバル化によって社会が均一化する一方で、地域ごとの対立も生じている。こうした課題を考える上で、風土の観点から地域や文化を見直すことが重要と指摘されている。いくつかの地域を比較し、国際的な視野で考える方法を学習する。講義各回は、地図やグラフ、写真などを観察する実習を取り入れ、学生自身が実践的に考えられる機会を設ける。</p>	
	比較文化論		<p>本講義では文化の定義を概観したのち、いくつかの文化現象を通して文化の多様性と動態および文化間の相互作用について考察する。とくに日本においては明治期の急激な西洋化を取り上げ、学生が日本の衣食住および芸術分野の近代化に関する広範な知識を得ることを目指す。また学期の終盤では定量的データを用いた価値観の国際比較を行うとともに、自由に設定したテーマのもと定性的なデータを用いた調べ学習を課す。これにより学生は学術的な比較の作法を身につけるとともに日本文化を相対化する視座を持つことができる。毎回の授業で学生には小グループでの討議およびその発表を課し、学生が自身の視点を相対化・客体化できるようにすることを意図した講評を加える。</p>	
	和食の基礎		<p>わが国は、狭いながらも南北に長く、また海に囲まれており、さらには四季があるという独特の条件から、多種多様な食材を古くから用いてきた。本授業では、そうしたわが国の風土により形作られてきた和食の文化的側面に加え、和食で古くから利用されてきた食材や近年利用されるようになってきた食材についてもその特徴や、それらを調理することによってどのような変化がおこりおいしさにつながっているのかについて解説する。また、和食の食材、料理に含まれる栄養素、またそれらを摂取することで如何に健康がもたらされるかについても解説する。古くから使われてきた食材については、目にしたことの無いものもあると予想されるので、映像や実物を用いて、わかりやすくより興味もてるように授業を進めていきたい。</p>	
	地域文化演習		<p>京都を中心とする歴史資料と民俗誌の中から年中行事や民俗慣行に関する叙述を取り上げて、京都に住む人々が、どのように日々の生活や行事に向き合っていたのかについて、学生とともに読み解いていく。歴史資料としては黒川道祐の『日次紀事』から、民俗誌としては井上頼寿の『京都民俗誌』の中から資料を取り上げていく。資料の読みと叙述されている内容については、最初に講義者が簡単に解説を行なう。受講生の皆さんには、グループワークとして解説された行事が現在、どのような状態になっているのかなどについて、図書館の資料やWEBでの検索などの手段を通じて調べてもらい、グループごとに報告をしよう。</p>	
	和食学	○	<p>「和食」は日本人の日常と関わる日本文化の要であり、豊かな風土とも関わり合いながら長い歴史を持ち、現在から未来へと繋がっていくものである。本講義では、まずユネスコ無形文化遺産に登録された際の議論から、「和食」とは何かということを理解することを最初の目標とする。次に、縄文時代から現代までの歴史的な展開を追い、「和食」が時代とともに変化してきたことを理解する力を養う。また、「和食」を構成する重要な要素である酒、発酵食品については、特に詳しく解説する。その上で、「和食」がいま直面している問題に注意を促し、これからの日本文化創造について考察する。これにより、日本文化を世界に向けて発信する基礎的知識を身につけることができる。</p>	
	民俗文化		<p>京都の文化は今も昔も人びとを魅了して止まない。その魅力の源泉ともいえるべき歴史や伝統や文化、そして季節や自然など、京都はその素材を巧みに活かしながら常に新しい魅力を発信し続けてきた。本講座では、盆踊りなどの民俗芸能や京都の夏を彩る祇園祭、京都に関わった歴史人物の伝承文化、そして京都の人びとが育んできた様々な民間信仰という4つの要素を題材にして、それぞれが京都という特色をどのように反映させて展開してきたのかについて考える。講義中には歴史資料や美術工芸品についての知識も応用し、映像資料等も適宜取り入れ、実際の資料の情報をふんだんに使いながら進める。そして、京都の事例を元にして民俗文化についての基本的な知識を習得し、その展開や文化財としてのあり方、そして現代社会における位置などについても考える。</p>	

和食と環境		和食は日本の自然環境や社会環境の中で形成され、変遷してきた。また、和食は環境への負荷が少なく、世界的にも「サステナブルフード」として注目を集めている。その一方で、昔ながらの和食を、今現在、継続するために、地球温暖化を進める結果となっていることの懸念もある。本授業の前半では、このように、環境によって作り出された和食、和食が環境に及ぼす効果・影響を学び、今後の和食のあり方を考えていく。後半には、和食をおいしいと感じる環境のあり方を、また、現在の食事環境の問題点をあげ、和食という食事空間を私たちがどのように作り伝えていく必要があるかを考えていく。	
民俗文化演習		京都には春夏秋冬の季節の移ろいに合わせた多彩な民俗文化が花開いた。祭礼や年中行事のほか食文化や服飾文化など、現在でも体感できる京都ならではの民俗事例を題材にして、授業を進める。最初に京都の民俗文化に関する事例や文献資料などを紹介し、受講生が興味を持ったものを積極的に調査にゆくことをサポートしながら、学生の自主的な調査活動とその報告を軸に講座を展開させる。また、調査に関する様々なノウハウを提供するため、講義から派生して全体でのフィールドワークを実施する。祇園祭など学生が参加しやすい事例を選び、それぞれの行事に参加しながらフィールドワークの手法を体感することで、学生がより深い経験を積めるよう、興味関心を持ったテーマを見つけて、そこにアプローチできる探求の方法を身につけることを目的としている。	
和食文化演習		本授業では、これまで学んできた和食文化について、体験することで理解を深める。具体的には和食についての基本的な調理操作を学び、実際に味わう。また、和食文化を代表する、そして、これまで各家庭で受け継がれてきた伝統的な加工食品を中心に、その製造方法を理解するとともに、どのように利用されてきたか、また、今の時代に合った利用方法についても学び、次の世代へと伝えることができる力を養ってもらいたい。さらには、作って食べるというだけでなく、和食文化の根底にあるもてなしの心を持って、自分が調理をして和食のすばらしさを伝えたいと思えるようになってもらう授業としたい。	
日本文化学特講Ⅳ	○	2013年、「和食」が日本人の伝統的な食文化としてユネスコの無形文化遺産に登録されたことで、和食文化が世界的にも注目されている。京の食文化が、その和食文化を代表する存在であることは誰もが認めるところであろう。この授業では、京の食文化について、その特徴とともにどのように成立してきたかについて、歴史的な要因、地理的要因等から考えていく。また、京の食文化を支えてきた野菜や魚介類、伝統加工食品などの食材を取り上げて解説するとともに、現在の状況について知り、これから何をどのように伝えていくべきかを考えていく。	
循環型社会論		今日、私たちは、多くのモノを生産、消費しながら生活しているが、それが自然の循環システムに乗っている状況では問題は生じていなかった。ヒトは自然の循環システムに乗らなくなったモノを作り出し、廃棄物が大量に発生する状況を作り出している。私たちは、このように自然に再生されない資源を大量消費し続ける状況を脱するために、社会そのもののありかたを転換しなければならない。その転換の道筋が循環型社会と言われているが、その形成における課題について、文化的側面から考察を加える。日本文化に備わっている自然循環システムを見直し、新たな消費社会の構築を考える。	
マンガ・アニメ・ゲーム文化		マンガ・アニメ・ゲーム文化研究の基礎となる文化を大学でまなぶ意味の理解、作品の観察、初歩的な論点の理解、の3点を修得する。具体的な授業計画としては、文化を大学でまなぶ意味に加え、アニメ『HUGと！プリキュア』と『ふたりはプリキュア』及びゲーム『原神』と『ゼルダの伝説BotW』における作品の観察、通販番組及びマンガ『僕だけがいない街』の表現技法について学ぶ。さらに、ゲーム『オシャレ魔女ラブアンドベリー』とマンガ『きらりん☆レボリューション』におけるメディア・フランチャイズを論点として学ぶ。ゲーム『スイカゲーム』及びTikTok「榎原ドリル」と楽曲XG “GALZYPHER”の比較によるサンプリングと独創について学び、EXITの漫才「サザエさん」とギャル文化、ナチュラルメイク文化と“盛り”文化から文化の越境的連関について学ぶ。	
コミュニケーション論入門		多様なバックグラウンドをもつ欧米人は、人々が持つ文化的な背景や価値観も多様であるため、必ずしも誰もがその背景に関する知識を同程度に持っているとは限らないため、できる限り間違いのないようにしようと直接的な表現を好む一方で、自国を人種的にも文化的にも均質であると考える日本人は、価値観や暗黙のルールをお互いに理解している前提で直接的なコミュニケーションよりも、人間関係や感情を表現することに重きをおいている。本授業では、西洋のコミュニケーション論を中心にしながら、日本文化におけるコミュニケーション論の特質について講義する。	

住居文化		住居学は、「人の暮らし」という壮大なテーマを扱う。人にとっての住まいがどのような変遷を辿ってきたのか、歴史や文化的側面に主眼をおいて学び、日本人がどのような生活をしてきたのかを振り返りながら、今後の住まい方について考える。調べ学習とプレゼンテーション、フィールドワークを通じた体験や、レポートの提出、ディスカッション、小テスト実施などを授業状況に応じて調整しながら進める。暮らしや日常空間に浸透した文化を読み解くほか、歴史的住居をフィールドワークを通して空間体験したり、住居の空間と歴史や文化をリンクして理解したりすることを通して、日本文化における住居の位置づけを学ぶ。	
サブカルチャー		サブカルチャーの代表的な研究方法を、作品論、作者論、受容論、ジェンダー論の4通りのアプローチを通じて修得することである。(1) 作品論として、時代区分と表現の比較を行う。具体的には、嵐「truth」、New Jeans「Ditto」「SuperShy」のミュージック・ビデオを分析する。(2) 作者論として、アニメ演出家・富野由悠季(作者の人生)、映画『アイアムアヒーロー』(作者の非特権性)、鷲尾天とアニメ『プリキュア』シリーズ(作者の意図)を取り上げる。(3) 受容論として、メディアの考察(SixTONESとBTSのメディア利用戦略)、ファン文化研究(ジャニーズファンと同担拒否)、ファンが求めるメンバーの「仲の良さ」(「不仲説」)、ファンと作品(『Yes!プリキュア5』と『オトナプリキュア』)を取り上げる。(4) ジェンダー論として、映画『アナと雪の女王』、齊藤なぎさ・上國料萌衣と女性ファン、シスターフッドとLESSERAFIM、ジャニーズ性加害問題と文化の倫理について学ぶ。	
多文化共生論		世界中の多くの国々と同様に、現代日本社会は多文化社会である。人種・民族・言語・宗教・文化などの異なる多様な人々が一つの国・地域で共に生きるための「相互の承認と受容」はいかにして可能となるか。多様なマイノリティを包摂して「すべての人の文化的生きづらさをできるだけ小さくする」ために、個人・社会はどうあるべきだろうか。本授業では、多文化共生のためのたしか視座を得るための基礎概念について解説する。内容としては、マイノリティとマジョリティ、文化的偏見とステレオタイプ、外国につながる子どもなどを通じて、日本社会における多文化共生について考える。	
デジタルプレゼンテーション		複雑化する社会の中で、職場や地域社会の場において、さまざまな価値観をもった他者と協働するにあたり、自らの意見やアイデアを相手にわかりやすく伝えるための力(「プレゼンテーション力」)が今後より一層求められる。社会問題の解決法を他者と共有し、共感を生み出したり、アイデアとアイデアをつなげ創造するためのツールとして、プレゼンテーションの場が会社や地域社会で設けられている。そこで、この授業では、プレゼンテーションの作成を助けるMicrosoft社のPowerPointの基本的な操作方法の習得とともに、オリジナルのスライド資料作りおよびプレゼンを通して、相手にわかりやすく伝え共感を生み出すための力を伸ばすことを目的としている。	
コミュニケーションと心理		ことばによるコミュニケーションのみならず、ノンバーバルなコミュニケーションも感情や意志を相手に伝える重要な手段である。身振り手振りやアイコンタクト、間や沈黙など、コミュニケーションには心理的な側面が強く、その属している文化の影響を色濃く受ける。本講義では、言語によるコミュニケーション、非言語コミュニケーションとその要素、アイデンティティとコミュニケーションを基礎として、グローバル化する世界の異文化と接触する面でのコミュニケーションの特徴、現代のメディアやSNSといったツールで用いられるコミュニケーション方法などを取り上げ、現代の文化におけるコミュニケーションとそのあり方について解説する。	
男女共同参画社会論		男女が共同参画しながら社会を形成していくことは、男女平等を達成するために必要であるとともに、多様な人々のウェルビーイングの達成に必要な不可欠なことである。また、成熟した文化の根底には男女が共に社会の一員としてそれぞれに応じた関わりをすることが担保されていない。グローバル化、脱工業化といった社会の仕組みが変化してきたがって、なぜ男女共同参画が重要となってくるのかを、ジェンダー・人権という視点を基底におきながら考える。男女共同参画の現状は諸領域においてどのような状況であるのかを検証し、これからの課題を探る。	
日本文学特講Ⅴ	○	文化を他者と共有する方法のひとつに言語を媒介としたものがあり、それらを多数の人に向けて可能にしたのが「出版」である。広義には、新聞などの印刷物すべてを指すが、狭義には書籍・雑誌の観光を意味し、文書のみならず絵画や写真も含む販売・配布行為である。出版の歴史の変遷は、同時に文化の伝播の変遷でもあり、情報の伝達手段がデジタルに切り替わっても、それが出版文化を基礎としていることに変わりはない。本授業では、出版の歴史を取り上げ、児童を主軸にしなが著作物の現代的意義、権利の保護等について概説する。	

<p>教育の基礎と制度（中高・栄養）</p>		<p>人間は一生涯（誕生から死に至るまで）変容し続け、成長を遂げていくものである。本講義ではまず、「教育とは何か」「子どもとは何か」「人間にとってそもそもなぜ教育は必要なのか」という根本的な問いについて議論する。つぎに、教育という営みの必要性和可能性について様々な思想を読み解きながら、理念的・歴史的・制度的に考察する。つづいて、教育法規・制度の成立と展開を辿りながら、現在の学校教育の役割や課題、学校と地域との連携について検討する。その上で最終的に、生涯学習と教育の現状と今後を展望し、将来教育の実践者としての自らの仕事を理解するための基礎を身につける。</p>	
<p>道徳教育論（中・栄養）</p>		<p>いじめ・不登校・SNS問題をはじめとする生きる力を育てる上での現代の課題を考えた場合、道徳教育に求められるものは大きい。その道徳教育の基本的な理論と実践方法を理解し、日々の生活に生かす道徳の授業づくりのスキルを身につける。また、一人の大人として教育者として、自分自身の道徳性を高めていこうとする態度を身につける。授業内容は、道徳授業の実践例から、道徳教育の魅力を知ることに加え、実践例と指導要領から、道徳教育の基本知識を身につける。また、指導案作成・模擬授業とスピーチ学習から、道徳教育観を確かなものにする。講義、グループワーク、模擬授業、課題（資料収集・実施演習）などを通じて知識の定着を図る。</p>	
<p>教職論（中高・栄養）</p>		<p>本講義は、「教職とはどのような仕事なのか」「なぜ自分は教師を志望しているのか」という問いから、教職について、また教師としての自己像について深く考えることを目的とする。まず、教職の本質と意義について原理的に考察する。つぎに、教師という仕事と役割、資質能力、職務内容等について概観する。つづいて、教職の歴史の変遷を辿りながらその理念、制度、実態などについて多角的に検討する。それらを踏まえて、教師としての仕事に求められる専門的性と社会的使命について、教職の在り方と関連づけて吟味する。その上で、教師としての資質向上とキャリア形成、またプロフェッショナル性を構成するものについて理解を深める。</p>	
<p>特別支援教育（中高・栄養）</p>		<p>近年、教育現場には全体の6.5%、およそ15人に1人の幼児・児童が特別な支援が必要といわれている。30人のクラスであれば、約2人はさまざまな支援を必要としていることになる。それらはひとくちに支援といっても、個人個人に必要なものが違い、多角的な支援を展開するためには、障害特性をしっかりと学んでおく必要がある。本講義では、障害特性をはじめに学び、続いてインクルーシブ教育を含めた特別支援教育の仕組みについて講義を行う。また、実践的な理解に資するように、教育現場の事例も取り入れて行う。ユニバーサルデザイン、障害者マークなど、身近な事例もあわせて講義する。</p>	
<p>総合的な学習の時間（中高・栄養）</p>		<p>総合的な学習の時間の先進事例をもとに、総合的な学習の時間の意義や、各学校における目標及び内容を定める際の考え方を解説する。本授業を通して、指導計画作成の考え方や指導と評価の考え方や実践上の留意点を理解するとともに、その目標達成のために必要な基礎的な資質・能力を身に付けるようにする。個別のテーマとして、「地域と自然環境」「地域の伝統と文化」「地域のまちづくり」「エネルギー資源と環境」「地域と防災」「和食の文化」などを設定し、これらが学習指導要領の内容とどのように関連があるか説明する。</p>	
<p>教育の方法と技術（ICT活用含む）（幼・小・中高・栄養）</p>		<p>中高及び栄養教諭の教育内容を理解し、効果的な授業を展開するために必要な教育の方法と技術について学ぶ。今日の学校教育現場では、従来の知識伝達を重視した伝統的な一斉授業に加えて、創造性・主体的な学習を重視する情報発信型の教育が必要とされている。こうした教育方法・技術を習得するために、基礎となる学習理論、カリキュラム開発、授業設計、教材開発、指導技術、プレゼンテーションの方法を学習する。また、インターネット機能やプレゼンテーションソフトが搭載されたパソコン、電子黒板や各種デジタルコンテンツ等のICTを活用した授業設計に関わる知識・技術を学ぶとともに、教育データの活用や遠隔・オンライン教育の基本を理解することにより、情報通信技術を活用した効果的な学習を推進する方法を習得する。</p>	
<p>教育課程総論（中高・栄養）</p>		<p>本授業では、教育課程の意義や編成の基本原則について考察し理解を深め、学習指導要領に基づいた教育課程の展開方法を学ぶ。さらに教育課程をめぐる代表的な思想や議論にも触れ、わが国の現状と学校・教師が抱える今日の課題を考える。基礎として、教科横断的な視点に立った資質・能力について考え、生徒及び特別な配慮を必要とする生徒への指導について講義する。そのうえで、「カリキュラム・マネジメント」の重要性や「主体的・対話的で深い学び」を理解し、子どもたちの能力や個性を伸ばす教育課程（カリキュラム）について学びを深める。その上で、個々の取得予定免許のカリキュラム作成に挑戦し、グループワークを通して実践的にカリキュラム編成の基礎的技法を学ぶ。</p>	

教育心理学（中高・栄養）		<p>個人のもつ潜在的能力の実現は、教育による個々人の学習と、加齢に伴う心身の発達を通じて達成される。本講義は、特別支援教育の視点も加味しながら、学習や発達とはいかなる過程なのか、学習や発達を促進させる要因と障害となる要因は何か、それらはどのように理論化されるのかなどの問題を考える。認知発達理論、発達段階、学習理論、動機付け、知能の構造、パーソナリティ、記憶、メタ認知などについても説明する。また、教育現場で生起するさまざまな心理的問題について、発達・学習・認知・人格・社会心理学などを含めた多角的な視点から、対処法も含めて考える。</p>	
特別活動（中高・栄養）		<p>学校教育の機能としての集団生活を基盤とした特別活動は、生徒の個性慎重を図ると同時に社会性の育成の場としての意義をもつ教育活動である。人としての生き方を学ぶ領域である。講義形式を中心に、グループワークや討議を取り入れ、学習指導要領や実践例をもとに、「特別活動」の教育課程上の位置づけ、基本的性格（問題解決を目指した主体的、実践的集団活動）や、その教育的意義の理解を図る。</p> <p>中でも、特別活動において育成を目指す資質・能力における三つの重要な視点「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を意識した指導のあり方に重点を置き、生徒理解や生徒指導・道徳教育・キャリア教育との関連を踏まえながら理解を深める。また、学習指導案を作成し、授業づくりの基礎基本を習得できるようにする。</p>	
生徒・進路指導論（中高）		<p>実際に学校で生起している具体的な問題について考え、生徒指導の理論や方法を習得する。集団におけるコンセンサスのありかた、教育相談の全体像と生徒指導・学級経営とのつながりを概説し、問題行動時のあり方や未然防止について講義する。不登校、いじめ、非行防止などについては、講義に加えてグループワークやディスカッションを行って実践力を養う。また、保護者対応ではロールプレイを実施し、コーチングスキルの修得も目指して授業を展開する。進路指導・キャリア教育について論究し、学校現場での実践を考察する。</p>	
教育相談（中高・栄養）		<p>教育現場では現代社会の多様性や急激な変化を背景にしたさまざまな課題が生じている。児童・生徒の教育的ニーズを把握し、問題への理解を深め、解決への糸口を探ることは重要なことになっている。教育相談では児童・生徒の心理的成長を図り、問題解決への道筋を図りながら成長発達をめざす必要がある。この授業では、教育相談における心理学的アプローチを学び、児童・生徒の発達状況に即して人格の成長を支援する方法について学ぶ。児童・生徒の心理的特性をふまえた教育的課題を支援するために予防的開発的技法や教育相談の活用について知識や実践力を身につける。</p>	
日本語文法		<p>日本語を品詞にわけて学習し、日常生活の中でどのように使われているのか、文で書く表現と話す表現のちがいを意識しつつ、日本語文法について学ぶ。名詞、動詞、形容詞、代名詞、助動詞、教詞、接続詞、冠詞といったものから、前置詞、後置詞、間投詞など品詞の連続性や分類の意義、分類の問題点もあえて、日本語の組み立てについて理解することを目的とする。小・中・高で学習した日本語文法（学校文法）を振り返るとともに、その特色を理解する。</p>	
古典文学講読		<p>『源氏物語』のいわゆる「玉鬘十帖」、玉鬘という女性をめぐる物語を読み進めていく。そのことを通して、古典文学、特に物語文学を読解するために必要な力を養う。いくつかの主要な場面を取り上げ、それらについて従来どのような視点から研究がなされてきたかを紹介しながら講義を進めていく。源氏物語は、世界最古の長編恋愛小説ともいわれるが、世界に多く存在する小説との違い、また与えた影響についても講義し、今日的な意義の深さを詳述する。「帯木」・「空蝉」・「夕顔」・「玉鬘」・「初音」・「胡蝶」・「蛭」・「常夏」・「篝火」・「野分」・「行幸」・「藤袴」・「真木柱」を紹介し、54巻からなる壮大な物語の全体をつかむ。</p>	
漢文学Ⅰ		<p>漢文訓読のための訓点や文法を習得し、訓読を理解し基本的な読解力を身につける。また漢文学を読むことで時代背景や人物エピソードを通して漢文の面白さや興味を深めることをめざす。なお、本科目は3回生前期の「漢文学Ⅱ」とあわせて受講することが望ましい。漢文と日本語文の違いを導入に、漢文の文型、返り点、置き字、再読文字、否定と禁止、疑問と反語、使役と受け身、比較と選択、限定・抑揚・詠嘆・累加といった文法について学ぶだけでなく、①矛盾、②蛇足、③四面楚歌といった著名な漢文学を読み、その日本文化に与えた影響についても理解する。</p>	

漢文学Ⅱ		「漢文学Ⅰ」で習得した訓点や文法を生かしながら、『古文真宝』に収録されている漢詩文を読み、作品の内容や表現を理解し読解力を深める。同時にそれら作品が生まれた歴史的背景、また様々な漢文学が日本の古代から近代までの日本文化に与えた影響も考察する。なお、本科目は2回生後期の「漢文学Ⅰ」とあわせて受講することが望ましい。取り上げる漢詩は、李太白「王昭君」、孟郊「遊子吟」、陶淵明「飲酒二十首其五」、曾子固「虞美人草」、白楽天「長恨歌」、「琵琶行」、屈原「漁父辞」、王羲之「蘭亭記」、蘇東坡「赤壁賦」、「後赤壁賦」、諸葛孔明「出師表」であり、その美しい言葉の世界を体験する。	
中等教科教育法Ⅰ（国語）		各回を講義的要素と実践的要素の複合により構成し、アクティブラーニングを通して理解を確かなものにし、技能を身に付ける。概ね回が進むにつれて実践的要素が増す。教育実習生、講師、若年教員の困りや相談内容を踏まえ、生徒に信頼される教師像を具現化するための考え方や音声、書字、教材の読み取り、問い・言語活動づくり、認め・評価、学習指導案作成などの方法を実践的に学んでいく。総じて概論的であり、Ⅱ、Ⅲ・Ⅳへとつながる内容である。教室4技能、科学的リテラシー、学習指導案の考え方についても学ぶ。	
中等教科教育法Ⅱ（国語）		各回を講義的要素と実践的要素の複合により構成し、概論的・基礎的なⅠをさらに国語科の授業づくりに特化した内容とし、アクティブラーニングを通して確かな理解と実践力を身に付ける。全員で共通の教材を扱うことにより、学習指導要領の趣旨を確実に具現化し、より多くの教材・単元に取り組みⅢ・Ⅳに進めるよう方向づける。話し言葉と書き言葉、漢字、語彙、文法、敬語、表現技法の演習、原因と結果、意見と根拠、比較や分類、情報の整理の仕方、引用の仕方、意見と根拠、具体と抽象、情報の信頼性の確かめ方、古文、書写、読書についての演習などによって指導法の概略をつかむ。	
中等教科教育法Ⅲ（国語）		演習的な内容が充実するよう必要に応じて講義も行うが、概ね演習的、実践的要素で構成し、アクティブラーニングを通して理解・技能をブラッシュアップしていく。「話すこと・聞くこと」と「書くこと」を主に扱うが、音声言語と文字言語の指導の共通点と相違点を明確にするために、また同じ題材で話すこと・聞くことと書くことに取り組むことも可能となるように、概ね交互に扱う。一部、書写、短歌、古典を「読むこと」等で扱う。授業者になるための講座だがその中で、生徒の視点でも、どのような授業者の関わり方が意欲を向上させるかといった気付きも期待したい。中高生にとっては難しい古文について、教材研究と指導事項の確認、授業プラン、板書計画作成を行う。	
中等教科教育法Ⅳ（国語）		演習的な内容が充実するよう必要に応じて講義も行うが、概ね演習的、実践的要素で構成し、アクティブラーニングを通して理解・技能をブラッシュアップしていく。説明的文章と文学的文章の指導の共通点と相違点をはじめ、文章の特徴に合わせた言語活動を案出できることが大切である。Ⅲと並行して進めることで、実際の学校での場面のように領域を結び付けた指導やその効果を見ることもあろう。「話すこと・聞くこと」「書くこと」に比べると「読むこと」は旧来から力を入れてきたことのように思われるが、読むことの指導方法こそ最も旧態依然に陥りやすい。テストや入試と結び付けがちな「読むこと」の学習だが、今日的な学力観に立脚して、毎時間の授業自体に成就感と自己有用感を得ながら学べる授業づくりを目指したい。	
教育実習事前・事後指導（国語）		教育実習に臨むための事前事後指導科目である。演習形式の授業を通して、実習のねらいと目的など、その意義を理解するとともに、実習への心構えを確かなものにする。実習に備えて、指導案作成、模擬授業及び児童生徒理解につながるロールプレイ等を通して実習に臨むために必要な力を身に付ける。実習校の学校組織や教育目標、重点取り組み等の理解を図る中で、実習に向けての自己の課題を明らかにする。ビデオを見たり、グループディスカッション、プレゼンテーションを行いながら授業を進める。	
教育実習Ⅰ（国語）		教育実習Ⅰ（中・高）の内容は、①生徒理解：担当学級の諸活動に入り、生徒についての理解に努める。②参加実習：実習校教員の授業を参観したり、教員の指示のもと生徒の支援・指導にあたる。（参観授業では授業記録をとる）実習校教員の指導のもとで、授業準備を整え、指導案を作成し、授業をする。③校務理解：教職員の勤務（とくに教育指導以外の職務）について、体験を通して理解する。（職朝、会議、研修等）単に現場を体験するのとは異なり、大学で学んだ理論と知識・技術を活かしながら、実習先の教員の指導のもと、あらゆる教育活動に取り組みねばならない。生徒一人ひとりの発達特徴やクラスの雰囲気をつかみ、クラス活動や授業を計画実施するだけでなく、組織としての学校とその中での教員の役割の全体像を学ぶことが求められる。	

教育実習Ⅱ（国語）		<p>教育実習は、「教育実習事前・事後指導」を履修し、その学修の一端として行われるものである。中学校は3週間、実習生として学校現場に身を置き、実習担当教員の指導の下、あらゆる教育活動に主体的に取り組む中で、生徒を育てる意味とその方法はもちろん、学校組織の一員としての役割と責任を見出すことを期待している。教育実習Ⅱ（中）の内容は、教育実習Ⅰ（中）に引き続いて、①生徒理解：担当学級の諸活動に入り、生徒についての理解に努める。②参加実習：実習校教員の授業を参観したり、教員の指示のもと生徒の支援・指導にあたる。実習校教員の指導のもとで、授業準備を整え、指導案を作成し、授業をする。③校務理解：教職員の勤務について、体験を通して理解する。</p>	
教職実践演習（国語）		<p>教職実践演習は、教員養成課程全体を通して、教員として適切な最小限度の資質能力を有機的包括的に身につけることができたかを判断し、不足しているところを補ったり、さらに資質能力を向上させたりするために課程の最終仕上げとしてなされる科目である。これまで身につけた資質能力を、具体的で実践的な演習方式の授業を通して、確実なものとするを目的としている。中学生・高校生の発達特性を踏まえ、現代社会の諸課題とも照らし合わせながら、個々の学生に応じた指導を行う。ビデオを見たり、グループディスカッション、プレゼンテーションを行いながら授業を進める。</p>	
図書館概論		<p>図書館の機能や社会における意義や役割について理解を図り、図書館の歴史と現状、館種別図書館と利用者ニーズ、図書館職員の役割と資格、類縁機関との関係、今後の課題と展望等の基本を学んでいく。図書館をめぐる今日的課題についての理解を深めるために、実際の事例にもとづいたグループディスカッション、プレゼンテーションを行いながら授業を進める。図書館の定義、欧米における公立図書館の制度化の歴史、日本の図書館の歴史的展開、学校図書館の役割と機能、大学図書館の法的根拠、機能、国立図書館の法的基盤、図書館奉仕など、その規模に応じた違いについても学ぶ。</p>	
図書館サービス概論		<p>図書館サービスの理念や様々なサービス、館種ごとのサービス、利用対象者別のサービスについて概説し、多様な図書館サービスの在り方を検討する。図書館サービスを阻害する要因についても検討し、一市民として図書館サービスに求められることを考察する。 レファレンスサービス、課題解決支援サービス、行政支援サービスとデジタルアーカイブ、児童・YAサービス、成人、高齢者サービス、障がい者サービス、活字を読むことに困難がある人へのサービス、大学図書館におけるサービス、学校図書館におけるサービス、専門図書館・国会図書館におけるサービス、図書館サービスと著作権の関連を学び、著作権法との関連を解説する。</p>	
情報サービス論		<p>図書館における情報ニーズとサービス、レファレンスツール及びレファレンスプロセスについて学習する。情報サービスとは何か、また情報サービスを提供する際に注意すべきことは何か、図書館と図書館員の役割を把握することが目的である。図書館における情報サービスの理解するために、グループワークやディスカッション、プレゼンテーションを行いながら授業を進める。レファレンスプロセスの概念について学習し、情報探索行動に対応したレファレンスプロセスの在り方について理解を深める。さらに、電子ジャーナルの種類について概説する。オープンアクセス雑誌と機関リポジトリについても学習する。</p>	
児童サービス論		<p>公共図書館にとって児童サービスは重要な担当業務である。子どもは、生涯続く図書館利用者だからです。知識を得るだけでなく、業務の実際を体験しながら、自発的に考え行動する児童図書館員の育成をめざす。子どもの図書館にとって、1. 子どもを知ること、2. 子どもの本を知ること、3. 子どもと本を結びつけること、が重要である。この3点を基軸に、子どもの読書、子どもの図書館、子どもの本を学習し、子どもの本を紹介する技術の習得を、ワークショップ形式で学ぶ。就学前の子どもの本、学童期の子どもの本、書評、読み聞かせ、ストーリーテリングなど児童と書物の関係について学ぶ。</p>	
図書館情報資源概論		<p>近年多様化している図書館情報資源について、その類型と特質、歴史、生産、流通、選択、収集、保存など、図書館業務に必要な情報資源に関する知識を習得することを目的とする。また、図書館の将来を見通した資料収集のあり方や、利用者に対する情報サービスの方法や心得に関する基本的知識の習得も目指す。図書館情報資源をめぐる今日的課題に関してグループディスカッションを行いながら授業を進める。コレクション形成における資源、コレクション形成理論の史的展開について学習するとともに、蔵書構築と蔵書構成、選択、収集、形成、維持について学習する。また情報生産の新たな仕組みとして、クラウドソーシング、クラウドコンピューティング、オープンソース・オープンアクセスなどについて学習する。</p>	

情報資源組織論		<p>情報資源を客観的に記述する目録法と、内容（主題）により資料を体系的に配列する分類法・件名法の歴史や意義、目録作成や分類・索引法の基本について概説する。</p> <p>図書館が扱う情報資源はWeb情報源も含め多様化しており、利用者の情報への世界規模でのアクセスを保障するための</p> <p>書誌情報の標準化やその意義について解説する。</p> <p>情報資源組織は図書館の資料の収集・保存・提供に不可欠な専門的な技術であり、専門的な用語を含め情報資源組織の基本的な知識や現状について理解を深める。</p>	
図書・図書館史		<p>図書の形態、印刷、普及、流通に関して歴史的に概説し、あわせて図書館の歴史的な展開についても解説する。古代知識の集積と図書館のはじまり、中世社会の思想と図書館との関係、近世図書館思想の広まりから公共図書館の誕生までの歴史を、西欧、中国、日本の視点から考えていく。図書館の歴史に対する理解を深めるために、グループワークやプレゼンテーションを行いながら授業を進める。修道院図書館や大学図書館、ガブリエル・ノーデやライプニッツの図書館思想、大英博物館図書館やボストン公共図書館の成立、紙の発明、四部分類などの西洋の図書・図書館史に加え、奈良時代から現代までの我が国の図書・図書館史についても講義する。</p>	
図書館基礎特論		<p>図書館司書課程の授業でこれまで学習した内容を発展的に深める。図書館におけるサービス内容を整理し、図書館サービスに関わるテーマを各自で設定し、関連する文献資料を収集、整理し、自己の見解をまとめ、伝達できるようにする。また、図書館の今日的動向を表すサービスの一つである課題解決支援サービスの在り方について、グループワーク、プレゼンテーションを通して考察を深める。公共図書館の管理運営やサービス内容からみる今日的な課題、指定管理者制度等の公共図書館をめぐる新たな動向、レファレンス協同データベース、公共図書館に求められる役割として注目されるサードプレイスの概念やラーニングコモンズについても講義する。</p>	
図書館制度・経営論		<p>図書館に関する法律、関連する領域の法律、図書館政策について学習するとともに、図書館経営の考え方、職員や施設等の経営資源、サービス計画、予算の確保、調査と評価、管理形態について学習する。図書館にも経営的観点が必要であり、そのことを理解するために、図書館経営やサービス計画に関して理解を深める。グループワークやプレゼンテーションを実施する。具体的には、図書館法、図書館のマーケティング、図書館の建築計画、管理運営の外部化について説明し、グループワークを行ってレイアウト図を作成する。</p>	
図書館情報技術論		<p>今日の図書館司書の業務は、コンピュータを中心とする情報機器に関する基礎知識と的確な情報処理を遂行するための実務の習得が不可欠である。本科目では、図書館業務に必要な基礎的な情報技術を修得するために、コンピュータ等の基礎、コンピュータシステム、データベース、検索エンジン、図書館システム、電子資料等について学習する。授業では、ほぼ毎回授業内容に関する課題や、グループディスカッションを行う。実践学習として、音声翻訳システムを体験する。デジタルアーカイブ、図書館と電子資料など今日的課題についても説明する。</p>	
情報サービス演習		<p>情報サービス、レファレンスサービス業務に必要な各種情報源（冊子体、電子データ）の基礎知識や検索理論・検索技法を講義と演習を通して学習する。また、図書館での蔵書検索、冊子体の文献情報の読み方、データベースの利用法等をテキストに記載されている演習課題を通じて実践的に身につけていく。発信型情報サービスの理解を深めるために、グループワーク、プレゼンテーションを行いながら授業を進める。Webページ、Webサイト、検索エンジン、インターネット上の情報の探し方、レファレンスコレクションの整備・評価の在り方について学習する。さらに、Web上に公開されているデータベースの調査、評価を行う。</p>	
情報資源組織演習		<p>図書館で扱う情報資源の組織化（目録作業・分類作業・件名作業）を演習形式で学び、図書館で目録作成・分類作成ができる実務能力の育成を図る。情報資源組織化の意義と目的、日本目録規則（NCR）の概要と総則、書誌レコードの検索演習、刊行方式、機器種別、キャリア種別、数量、大きさ、体現形の識別子、入手条件、体現形に関する注記の記録演習、逐次刊行物、電子資料、動画資料、録音資料の記録演習など、これまでの学びのまとめとなる実践的内容を教授する。</p>	

博物館概論		博物館は生涯学習機関でもあり、社会教育機関でもあり、研究機関でもあり、文化的拠点として多様な社会的機能を果たしている。本授業では、まず、自らの博物館体験を思い起こすことから始め、博物館とはなにか、その定義や仕組みを解説し、博物館の歴史を辿りながら、調査・研究、資料整備、展示、交流活動、広報活動などその活動の全体像を理解することを目標とする。また、職員から利用者・入館者まで、そこにどんな人々関わっているかを想起させて博物館の役割についての理解を深め、さらに、独立行政法人化や指定管理者制度など、博物館をとりまく社会的な現状についても触れる。これにより、博物館の活動内容や果たしている役割を理解することができる。	
生涯学習論		生涯学習は現代を生きる我々国民の権利であり、図書館や博物館などの活動を効果的に行うためには、生涯学習の理念や実際を把握しておく必要がある。本授業では、まず、年齢に応じた学習の課題を理解することから出発し、生涯学習の考え方、その意義を考えることを最初の目標とする。そして、生涯学習にはどのような活動があるのかを把握し、それを支える仕組みや博物館、図書館、公民館、スポーツ施設などの施設での学習方法について学ぶ。その上で、特に、博物館では、参加型調査やボランティアなどで博物館の活動に参加することによって高い学習効果があがることについて紹介する。これにより、博物館が生涯学習に果たすべき役割の重要性について理解することができる。	
博物館資料論		博物館資料を収集整理、保管し、それらの資料を研究や展示、教育活動に活用することは、博物館の根幹をなす活動である。講義は、博物館資料の収集・整理・保管等についての理論や方法に関する知識・技術を習得し、また博物館の調査研究活動について理解することを通じて、博物館資料に関する基礎的能力を養うことを目標とする。博物館活動の根幹をなす博物館資料について、博物館資料とは何か、資料にはどのようなものがあり、どのように分類されているのか、そして資料の受け入れから登録までの資料化のプロセスを解説する。また、博物館資料の収集、保存・管理の方法について、人文系資料や自然史系資料に分けて具体的事例をあげて解説する。さらに、収集した資料の研究活動、展示、教育活動での活用・公開の意義や方法について解説する。最後に館種別の博物館資料について解説する。	
博物館展示論		展示は、博物館の顔であり、博物館の主要な機能のひとつである。講義は、展示の歴史、展示メディア、展示による教育活動、展示の諸形態等に関する理論及び方法に関する知識を習得し、博物館の展示機能に関する基礎的能力を養うことを目標とする。調査研究の成果やコミュニケーションとしての展示について、本質的な意義や目的を解説する。また、展示の企画立案から展示までのプロセス、関係者との協力や展示の評価と改善・更新について解説し、展示に係る基礎的な知識と能力、実践力を身につける講義を行う。学芸員としての実務経験をもとに、国内外の展示に関する事例を分析・紹介することにより、博物館の展示機能を多面的に理解する授業を行う。	
博物館資料保存論		博物館資料の保存について、保存科学的な知識を身につけるとともに、博物館現場での取り組みについての事例を紹介し、博物館における資料保存の基礎的な能力を養うことを目標とする。具体的には、資料の保存環境についての温度・湿度などの科学的な知識、資料の劣化要因となる光の害、生物的な被害に結びつく黴や虫の話し、IPMの考え方、展示室や収蔵庫の保存環境の測定、維持の仕方、自然災害や人為的被害を防ぐ施設の作り方、ファシリティ・レポート、資料の修理・修復の進め方などについて講義を行う。	
博物館教育論		博物館における教育普及事業について、博物館法を踏まえた上で、各地の博物館現場での取り組みについての事例を紹介することにより、博物館における教育的機能について理解することを目標とする。具体的には、博物館の展示、資料の調査・研究、普及活動、出版物等による教育的な活動を知るとともに、その取り組み方についての講義を行う。さらに、住民参加型の博物館、学校・図書館・文書館・公民館などと連携する博物館など今日の多様な姿を取り上げ、博物館における教育的機能を展開させる方法を考える。	
博物館経営論		博物館の経営・運営について、経営（収支）・運営（組織）の現状を認識した上で、各博物館の取り組みの事例を紹介し、博物館における運営・経営についての今日的な考え方を養うことを目標とする。具体的には、博物館の経営・運営の統計的な数字、その歴史の変遷などを踏まえるとともに、利用者の満足度を上げるための方法、住民に期待される博物館の作り方、行政や教育施設・協賛会社・支援者との関係、コロナ閉館の対応、情報発信、ボランティアの導入、博物館理念の再構築など、博物館経営・運営の全般について講義を行う。	

博物館情報・メディア論		<p>博物館の基本的な役割である資料の収集保存、研究、展示、教育活動のさまざまな場面で、情報通信技術やメディアが活用されている。講義は、博物館における情報の意義と活用方法及び情報発信の課題等について理解し、博物館の情報の提供と活用等に関する基礎的能力を養うことを目標とする。博物館における情報通信技術やメディアの活用方法、およびメディアとしての博物館が行う情報発信について概観し、その基本的な考え方や実践的な取り組みを行っている博物館を具体的事例にして解説する。収集保存、調査研究、展示教育という博物館がもつ機能ごとの情報の蓄積と活用について概観する。また、メディアとしての博物館について、情報通信技術や社会との関わりなど、博物館における情報発信のあり方についても考察する。さらに、著作権など博物館と知的財産との関係について解説する。</p>	
博物館実習		<p>博物館の活動は様々な分野の実務によって支えられている。本授業では、主に学芸員が行う調査・研究、資料整備、展示、交流活動、広報活動、交渉などの業務を順番に疑似的に体験し、実際の現場での活動を具体的にイメージできるようにすることを目標とする。そのため、活動全体のテーマの構想、展示・広報計画の作成、資料の選定、資料の取り扱い、資料の採寸など調書の作成、資料の撮影、資料の梱包や陳列、照度計や温湿度記録計の測定などの保存環境の整備、SNSでの発信などを行う。また、接客や交渉などの基本についても指導を行う。これにより、学芸員としての基礎を身に付けることができる。</p>	

組織の移行表

令和6年度		入学 定員	編入学 定員	収容 定員	令和7年度		入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
京都華頂大学					京都華頂大学					
(専攻)					(専攻)					
現代生活学部					現代生活学部					
こども生活学科		50	-	200	こども生活学科	50	-	200		
生活情報学科		30	-	120	生活情報学科	30	-	120		
食物栄養学科	管理栄養学 食文化	60	-	240	食物栄養学科	60	-	240		
計		140		560	計		180		720	学部の設置 (認可申請)
華頂短期大学					華頂短期大学					
幼児教育学科		150	-	300	幼児教育学科	120	-	240		定員変更 (△30)
総合文化学科		50	-	100	総合文化学科	-	-	-		学生募集停止 (△50)
計		200		400	計		120		240	
佛敎大学					佛敎大学					
大学院					大学院					
文学研究科					文学研究科					
修士課程	仏教学	10	-	20	修士課程	仏教学	10	-	20	
	文学	10	-	20		文学	10	-	20	
	歴史学	10	-	20		歴史学	10	-	20	
博士後期課程	仏教学	3	-	9	博士後期課程	仏教学	3	-	9	
	文学	3	-	9		文学	3	-	9	
	歴史学	3	-	9		歴史学	3	-	9	
教育学研究科					教育学研究科					
修士課程	生涯学習	10	-	20	修士課程	生涯学習	10	-	20	
	臨床心理学	10	-	20		臨床心理学	10	-	20	
博士後期課程	生涯学習	3	-	9	博士後期課程	生涯学習	3	-	9	
	臨床心理学	3	-	9		臨床心理学	3	-	9	
社会学研究科					社会学研究科					
修士課程	社会学	5	-	10	修士課程	社会学	5	-	10	
博士後期課程	社会学	3	-	9	博士後期課程	社会学	3	-	9	
社会福祉学研究科					社会福祉学研究科					
修士課程	社会福祉学	5	-	10	修士課程	社会福祉学	5	-	10	
博士後期課程	社会福祉学	3	-	9	博士後期課程	社会福祉学	3	-	9	
計		81		183	計		81		183	
仏教学部					仏教学部					
		3年次					3年次			
仏教学科		60	5	250	仏教学科	60	5	250		
文学部					文学部					
日本文学科		120	-	480	日本文学科	120	-	480		
中国学科		50	-	200	中国学科	50	-	200		
		3年次					3年次			
英米学科		70	5	290	英米学科	70	5	290		
歴史学部					歴史学部					
		3年次					3年次			
歴史学科		110	5	450	歴史学科	110	5	450		
歴史文化学科		70	-	280	歴史文化学科	70	-	280		
教育学部					教育学部					
		3年次					3年次			
教育学科		130	10	540	教育学科	130	10	540		
幼児教育学科		80	-	320	幼児教育学科	80	-	320		
		3年次					3年次			
臨床心理学科		80	5	330	臨床心理学科	80	5	330		
社会学部					社会学部					
現代社会学科		200	-	800	現代社会学科	200	-	800		
公共政策学科		120	-	480	公共政策学科	120	-	480		
社会福祉学部					社会福祉学部					
		3年次					3年次			
社会福祉科		220	15	910	社会福祉科	220	15	910		

保健医療技術学部			
理学療法学科		40	- 160
作業療法学科		40	- 160
看護学科		65	- 260
		3年次	
計		1455	45 5910
通信教育部			
大学院			
文学研究科			
修士課程	仏教学	15	- 30
	文学	15	- 30
	歴史学	15	- 30
博士後期課程	仏教学	3	- 9
	歴史学	3	- 9
教育学研究科			
修士課程	生涯学習	10	- 20
	臨床心理学	6	- 18
社会学研究科			
修士課程	社会学	10	- 20
社会福祉学研究科			
修士課程	社会福祉学	10	- 20
計		87	186
通信教育部			
仏教学部			
仏教学科		100	- 400
文学部			
日本文学科		100	- 400
中国学科		50	- 200
英米学科		100	- 400
歴史学部			
歴史学科		100	- 400
歴史文化学科		100	- 400
教育学部			
教育学科		400	- 1600
幼児教育学科		50	- 200
社会学部			
現代社会学科		300	- 1200
公共政策学科		100	- 400
社会福祉学部			
社会福祉科		200	- 800
計		1600	6400

保健医療技術学部			
理学療法学科		40	- 160
作業療法学科		40	- 160
看護学科		65	- 260
		3年次	
計		1455	45 5910
通信教育部			
大学院			
文学研究科			
修士課程	仏教学	15	- 30
	文学	15	- 30
	歴史学	15	- 30
博士後期課程	仏教学	3	- 9
	歴史学	3	- 9
教育学研究科			
修士課程	生涯学習	10	- 20
	臨床心理学	6	- 18
社会学研究科			
修士課程	社会学	10	- 20
社会福祉学研究科			
修士課程	社会福祉学	10	- 20
計		87	186
通信教育部			
仏教学部			
仏教学科		100	- 400
文学部			
日本文学科		100	- 400
中国学科		50	- 200
英米学科		100	- 400
歴史学部			
歴史学科		100	- 400
歴史文化学科		100	- 400
教育学部			
教育学科		400	- 1600
幼児教育学科		50	- 200
社会学部			
現代社会学科		300	- 1200
公共政策学科		100	- 400
社会福祉学部			
社会福祉科		200	- 800
計		1600	6400